

H30年度Ⅰ期 グループ企画5

番号	氏名	渡航先	国・地域	渡航先での受入期間
1	Y. R	International Medical University (IMU 国際医療大学)	マレーシア	H30/8/20-H30/8/27
2	N. N			H30/8/21-H30/8/27
3	U. Y			H30/8/20-H30/8/27
4	H. S			H30/8/20-H30/8/26
5	M. H			H30/8/20-H30/8/27
6	M. N			
7	S. T			
8	N. T			
9	K. K			
10	K. H			
11	T. T			

平成 30 年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 2 年

氏名 Y. R

1、概要と目的

本プログラムは、AMSEP (Asian Medical Students' Program) というアジアの医学部間における交換留学の一環である。AMSEP は、AMSA (Asian Medical Students' Association、アジア医学生会議) という国際的な非営利の学生団体によって主催される。AMSEP の概略は、AMSA 加盟国 (2018 年現在、正会員はアジアを中心とする 16 カ国) の医学部同士の学生間で直接交渉し、5～10 日間の短期留学を互に行うというものである。滞在中のスケジュールはホスト国の学生に一任され、ホスト国の学生は、留学生のスケジュールに基本的には全て同伴する。今回は、我々大阪大学の学生が 8 月 20 日～27 日に International Medical University (国際医療大学、以下 IMU) を訪問し、ほぼ同じメンバーが 1 月 6 日～13 日に IMU の学生を大阪に受け入れる予定である。

スケジュールは、Academic Program と Social Program に分けられ、観光や文化施設の見学は後者に分類される。すなわち、観光などの直接学問とは関係ない活動も、プログラムの一環として見なされているということを意味する。

留学の目的としては、(1) 病院見学や講義の聴講を通して医学知識の幅を広げる、(2) 医学教育や医療制度の違いを学ぶ、(3) 海外の医学生との英語を通じた交流を行うことで、国際的な人脈を広げるとともに英語の運用力を高める、(4) 文化施設等の見学を通して教養を深める、ということが挙げられる。

2、スケジュール

※8 月 24 日の夜～25 日にかけて、ペナン州へ一泊二日の旅行に行った。

8 月 19 日	関西国際空港発、クアラルンプール国際空港着。
8 月 20 日	プトラジャヤ観光。
8 月 21 日	大学にて講義 (心筋梗塞、カイロプラクティック、中国医療)、スリア KLCC 観光。
8 月 22 日	「バトゥーの洞窟」観光、Royal Selangor Pewter House 見学。
8 月 23 日	Seremban Hospital 見学、Cultural Night。
8 月 24 日	大学にて講義 (手技体験、解剖学)、Forest Research Institute Malaysia 見学。
8 月 25 日	ペナン州、Penang Hill や Kek Lok Si の観光。
8 月 26 日	Islamic Art Museum で医療の歴史に関する展示を見学、Batik (染め物) 体験。

8月27日	クアラルンプール国際空港発。
8月28日	関西国際空港着。

3、プログラムの詳細と各日程の感想

8月20日

午前中は、セランゴール州（クアラルンプール市を含む州）のショッピングモール、**Sunway Pyramid** に案内してもらった。古代エジプトをイメージした外観で、正面に位置する巨大なピラミッドと、入り口付近のスフィンクスの銅像が印象的だった。内装は近代的で、入っている店舗もアシックスやソニーなど、ほとんど日本と変わらないものも多かった。1Fには大きなスケートリンクがあり、多くの人がプライベートを楽しんでいた。常夏の国だからこそできる発想であろう。私もスケートに挑戦してみたが、スケート靴を履いてリンクの上に立つことすらできなかった。

午後には、マレーシアの行政上の首都である、連邦直轄領プトラジャヤに行った。クアラルンプールからプトラジャヤには、今世紀初頭に国家計画として行政機能が移転されたといい、首相官邸をはじめとするほとんどの官庁が存在する（ただし国会はクアラルンプールにある）。湖の広がる美しい水辺の風景に数々の建物が調和し、均整というものを絵に書いたような光景であった。

プトラジャヤの主要な景観の一つである、ピンク・モスク（Masjid Putra）の中を見学させてもらう。お祈りの時間は避けないと駄目だとか、半ズボンでの入場はいけないといったルールは厳しく決まっている。管理人に日本の医学部生だと言うととても興味を示したようで、何やら知り合いが書いたという本を出してきて解説を始めた。正座やお辞儀などの礼拝の態勢を取っているときの生理学的な変化（心拍や呼吸、脳波や筋電など）を調べ、お祈りは健康にいいですよと結論付けた本であった。医学研究にこの発想はなかったと感動した。脳波のほとんどがノイズではないのか気になったが、いずれにしても宗教が幅広い分野に影響していることを垣間見た気がした。モスクの中は、15,000人を収容できるというだけあって、壮観な光景が広がっていた。首相官邸の隣にこれほどのモスクがあるということから、イスラム教がこの国で担う大きな役割について思いを馳せた。

夜は、現地中華料理屋に連れて行ってもらった。マレーシアには、中国系の華僑と現地のマレー系、そしてインド系のムスリムが混在しているため、地元の料理もマレー料理、中華料理、インド料理の3つが存在する。日本では高級店にしかない、中華料理の円卓を体験できた。

8月21日

この日は大学での授業が3つあった。その前に、学生にキャンパスを案内してもらった。メインの建物は講義室や図書館、実習施設やホールなどが全て含まれる巨大なもので、中央部分がショッピングモールのように吹き抜けになっている。1F部分には、阪大の

CoMIT にあるような、手技の練習をする場所があった。手技とは言っても、産婦人科系や消化器系など、非常に現実的なシミュレーターが多数用意してあった。ビデオ教材も取り揃えてあった。IMU の学生は1回生のときからここで、臨床医学の練習をするそうである。大学というより専門学校に近い雰囲気だと思った。

最初に受けた授業は、心筋梗塞についての授業であった。AMSEP 下の留学では、大学側が特別に授業をデザインしてくれるのが一般的なのだが、IMU の学生と一緒に普段の授業を受けるという形式であった。しかも、教授は我々の存在を把握していたようで、最初には大声で紹介され、途中では質問まで振られてしまった。転校生になったような気分だったが、おかげで世界の医学部の授業を生で体感することができた。既往歴からの診断など、4回生で扱う臨床科目のような感じだったので、これは4回生の授業かと聞くと、1回生の授業だと言われて驚いた。聞くと、IMU では医学を理論ごとではなくシステムごとに学ぶそうで、例えば「循環」という授業では、解剖から組織・生理学的事実、臨床応用に至るまで全てを扱うそうである。確かにこの方が臨床医になってから、知識の縦の繋がりができるかもしれないと思った。

次に、Prof Michael Thomas Haneline によるカイロプラクティックの授業を受けた（ここからは我々留学生だけの授業となった）。簡単な理論（脊髄を施術することで中枢神経系を安定させる）の説明の後、2人一組のペアを組んで実際に施術を体験した。主に、頸椎と腰椎を指で押さえ、上下に移動させていく。左右の指の感触を比較して凝りを感じ、その部分を重点的に揉んでいく。カイロプラクティックは英国などでは理論的に研究されており、論文なども書かれているようで、どのようにこの施術と学問を結び付けるのか興味が湧いた。

最後に受けた授業は、中国医療に関するものであった（Prof Zhou Wen Xin）。中国医療というと、理論的な西洋医学とは相反するように思えるが、最初のスライドでいきなり、2015年にマラリア治療薬の発見でノーベル賞を受賞した屠呦呦博士が登場して驚いた。化学的な機序から理解された合成薬を研究するのみならず、伝統的な漢方薬から革新的な治療法を考案するのも面白いと感じた（もちろん、このような伝統的な手法を科学的に検証することで、西洋医学との融合も可能である）。希望したメンバーが何人か、先生の簡単な鍼治療を体験した。針を皮膚に刺しているのにもかかわらず、みな口を揃えて痛くないと言っていたのが印象的だった。

この後、大学内で開会式が行われた。現地の責任者を務める学生や、IMU 側コーディネーターの Arun 教授（病理学）のスピーチのあと、学生有志によるピアノ演奏があった。スタジオジブリからの音楽や、数年前に大ヒットした映画「君の名は」のサウンドトラックからの抜粋などをメインとしたプログラムで、日本映画（特にアニメーション）がこれほど遠く離れた異国の地でも好意的に受け止められているのだと、少し嬉しくなった。最後にベートーヴェンのピアノソナタ第8番「悲愴」から第一楽章の演奏があったのだが、これが本当に感動的な演奏で、思わず終了後に歓声を上げてしまった。後で

この学生に聞くと、大学に入学してからピアノを始めたということで、少し信じられなかった。

その後、地下鉄（KL Track）に乗って、クアラルンプールの中心部へ向かった。乗車する際に現地の学生から、日本の ICOCA にあたるような IC カードを渡された。これは高速道路に乗るときにも共通して使えるようで非常に便利らしいのだが、その名を Touch and Go というらしい。イメージ上はいかにも IC カードにぴったりなように思えるが、これは英語のイディオムで「危険な」「一触即発の」という意味なのだが…何かのブラックユーモアなのだろうか。

マスジット・ジャメ駅（Masjid Jamek）で電車を降り、近辺を散策する。街中は整備されており、銀行の本店と思われる高層ビルも多く見られた。マラヤ連邦の独立記念広場であるムルデカ・スクエアに立ち寄った。英国からの独立を記念する高い塔の周りに人が集まる様子は、市内の各所に常に掲げられているマレーシア国旗とともに、この国特有の愛国意識を感じさせた。独立記念日は 8 月 31 日で、この日はここで式典などが開かれるそうである。現地の土産物屋に立ち寄ってココナッツミルクを頂いた後再び電車に乗り、目的地であるスリア KLCC に向かった。

KLCC 駅から直結しているこのショッピングセンターは、世界で最も高いツイン・タワーであるペトロナス・ツイン・タワーと連結しており、圧倒的な外観を呈している。当然ながら内部もとても広く、水族館やコンサートホールが併設されている。フードコートに向かい、エイの唐揚げ（スダチをかけて食べるところが、日本食を思い出させる）を頂いたあと、屋上庭園で開催されている噴水ショーを見に行った。頭をいっぱいに傾けても視界に収まらないほどのツイン・タワーをバックに、様々な形の噴水が、色とりどりのライトアップを受ける。

ふと、この建物が設計された当時のことを考える。実用性という意味で考えれば、これほど巨大な建物は不必要である。ツイン・タワーに入居しているオフィスは近くのビル街に入居させれば十分であり、ショッピングモールに入る店も、日常生活に必要不可欠であるとは言いがたい。まして、噴水に至っては言うまでもないであろう。従って、この建設に予算を使うことが決まった時は、反対意見も多かったかもしれない。にも拘らず現在、私たちのような外国人観光客はこの場所を「マレーシアを代表する場所」とであると捉え、その壮大な風景に圧倒される。このような、文化的「アイコン」のような存在が、果たして日本にあるのだろうか。2020 年の東京オリンピックや、誘致中の万国博覧会には、多額の資金をつぎ込むことに対する反発が多いが、仮にそれが日本の象徴として後世まで世界に記憶されるものならば、そこへの投資は無駄だと言えるだろうか。煌々と輝く夜の街は、そんな省察も呼び起こした。

8 月 22 日

午前中は、ヒンドゥー教の聖地であるバトゥーの洞窟を見学した。洞窟の外側には金色の大きな大仏があり、その横には 250 段を超える険しい階段がそびえている。息をはず

ませながら階段を登り切り、薄暗い鍾乳洞をくぐり抜けると突然視界が開け、切り立った高い崖が 360 度、我々のいる場所を取り囲む。崖には野生の猿がゆうに 100 匹は生息しており、垂直にそびえる岩の間を軽々と走り抜けていく。奥には神殿のようなものがあり、ここにはヒンドゥー教徒以外は出入りしてはならないらしい。さらに鳩の大群が翼を広げると、神聖で、どこかこの世のものではないような雰囲気を醸し出していた。ちなみに、サルはヒンドゥー教の教えと何か関係あるのか、と聞いたところ、特にはない、観光客が来て餌付けをするから…とのことで、どこの国も観光地というものは苦勞されているのだと思った。実際、サルは時にかなり凶暴で、メンバーの一人は洞窟の入り口付近で、朝食の入ったビニール袋を目掛けて襲われていた。パンの包み紙を引き裂いて何事もなかったように食べるサルの姿にはショックに近いものを覚えたが、動物が人に慣れすぎるのは本当に危険だと思った。

メインの洞窟以外にもう一つ、**Dark Cave** と呼ばれるものがあり、そこには一般人は立ち入りできない。**Dark Cave** には独自の生態系があり、ここでしか見られない種のヘビや虫も複数いるそうである。洞窟の端には、このような新種発見を報告する論文のコピーが多数貼られていた。このような生態系の管理といった研究も、純粋な学問として面白そうだと感じた。

洞窟を降りてからココナッツ水（ココナッツを縦に割り、ストローで吸うだけの代物。味が薄すぎて口に合わなかった）を頂いた後、昼食に豚の角煮のようなものを頂いて（本当にマレーシア国民はよく食べる）、次の目的地である **Royal Selangor Pewter House** に向かった。ピューターとは、18 世紀イギリスで開発された金属で、スズとアンチモンの合金である。マレーシアのセランゴール州（クアラルンプールを含む州）はスズの産地であり、英国系の企業である **Royal Selangor** はピューターの貿易で大きな財をなした。現在も高級ブランドとして世界中で認知されており、テニスの ATP マスターズのトロフィーに、デザインが採用されるほどだそうである。

この企業博物館には、来場者を飽きさせない工夫が多数されていた。ピューターの比重を説明するために、巨大な天秤を用意してそこに人が乗れるようになっていたり、あらゆるところにクイズが貼ってあって自分たちで答えを見つけるようになっていたり。工場ツアーでは、ピューターを鋳型に流し込んで成型するまでのプロセスを、順を追って見ることができた。このような、博物館という枠に囚われない体験型の施設は、日本も見習ってもいいと思う（近年は増えてきたが）。附属の土産物屋では、日本円にして 400 万円を超えるような置物が売っていた。

夜は、クアラルンプール市内の夜市に向かった（その前に、スイーツ店に入って大量の甘味を食べさせられた。本当にこの国の人はよく食べる）。なんと **2km** にもわたって店がひしめいている。通りの幅はそこまで狭くないにも関わらず、東京の通勤電車顔負けの混雑ぶりで、メンバーを見失わず前に進むのは困難を極めた。マレーシア特有のラーメンや焼きそば、中華菓子や惣菜などを食べ歩き、現地の食文化を肌で感じることで

きた。現地の学生と一緒に回ったのだが、途中、彼らは何度も **Are you full?**（お腹はいっぱいか）と聞いてくる。既に食べすぎの傾向にあった私が何度も **I'm enough.** と返事をしても、なかなか信じてもらえず、色々なところで買ってきた料理を次々と運んでくる。さすがに閉口したが、今から振り返ってみれば、これが彼らなりのホスピタリティなのであろう。

8月23日

この日は、IMU からバスで一時間ほど、郊外にある **Seremban Hospital** の見学であった。この病院は、IMU の臨床キャンパスに併設されているとのことで、IMU の学生は1、2回生をメイン・キャンパスで過ごした後、基本的にこちらの **clinical campus** で授業と実習を一緒に行うということである。メイン・キャンパスの横に病院のようなものがあつた記憶があるのだが、聞くとそれは **Healthcare Center** で、外科手術などを行う部門はないそうである。その代りに地域に臨床専門のキャンパスを3つほど用意しているということだが、私は大阪大学のように、キャンパスに基幹病院が位置する方が、臨床と研究の障壁が低くなって良いと思った。

まず、簡単なキャンパス・ツアーが行われた。大学のキャンパスなので、学生用の交流会館や、図書館もきちんと存在する。図書館には見事に臨床関係の本しかなく、生理学など基礎的な学問のコーナーにも「臨床から見る生理学」といった趣の本ばかりが並んでいた。嬉しかったのは医療統計の本が充実していたことで、マレーシアでも日本と同じく **R** や **SPSS** を使っているらしかった。また、節電の関係でエレベータの使用を制限しているのだが、その制限の仕方が面白く、エレベータの扉にでかでかと **You're lack of exercise? Then, don't use me!** などとペンキで書いてある。旧宗主国イギリスの影響を受けたユーモアだろうか、このような光景を見ると、ああ、海外に来たのだなと感じる。

続いて、IMU の学生がいつも練習しているという手技をいくつか体験した。最初に、シミュレーターを使って、気道挿管と採血の練習をした。気道挿管では、意識のない患者さんを扱っているという前提なので、顎を機械でこじ開けるのが極めて難しかった。実際の現場でも同じくらい固いということである。また、挿管の際に、どこに空気が流れてどこの圧力が上がって…というようなことを考えることと、実際の手技を両立するのは難しいということがわかった。現場で働く先生方は、器具の理論的な内容を頭に入れた上で治療されているのであり（そうでないと過去にない症例に対応できない）、頭が下がる思いがした。採血の方は、操作はそれほど難しくなかったが、「清潔な」手袋のはめ方を何度も練習させられた。これは、早期臨床体験実習で学んだものと同じであり、国は違えど清潔の概念は変わらないのだと感じた。

続いて、シミュレーターを使った救急患者への対応を体験した。このシミュレーターというのは、本当に驚かされるものだった。患者を模したロボットなのだが、きちんと血液も流れており、呼吸もし、医師が施す治療によって血圧や脈拍がその都度変化する。

私は人工呼吸の練習として、空気を通じる袋を口に繋ぎ、袋の空気を圧縮させて押し出したのだが、本当にその都度モニターの数値やグラフの形状が変化した。吸入する空気の酸素濃度や二酸化炭素濃度による生理学的変化まで正確に再現できるというのだから、大したものである。病気のモデルも作ることができ、心臓病を聴診器から診断する練習なども行った。そして、何よりこのロボットには AI が組み込まれており、医者と話することができる。「苦しいです」とかいった呻き声も出せる（したがってコミュニケーションの練習も可能である）。ここまできると何を相手にしているのかわからなくなってくるが、こういった機械が大学に普通に存在するのである。

その後、小児科医の **Dr. Erwin Khoo Jia Yuan** の案内で、新生児科（NICU）を中心に病院内を案内してもらった。院内は清潔で、日本の病院とほぼ同じような様相だったが、病室のベッドの間に仕切りのカーテンがないのが印象的であった。院内には、病気のため学校に行けない子供たちのための学校教室もあり、国の文部省から教員が派遣されるということである。**Yuan** 先生のお話は多岐にわたり、小児黄疸の治療として、ビリルビン代謝を促進するための光線療法を実施することがあるなど、臨床に密着した話も伺えた。しかし、最も記憶に残っているのは、「マレーシアの患者の 75%が公立病院に行くが、国の医療資源の 75%は私立病院に使われている」というお話だった。マレーシアでは、医療の質という面では私立病院の方が圧倒的に高く、優秀な医師も揃っているが、医療保険制度がないため、中間層以下の患者は公立病院に行かざるをえないという、格差が存在する。日本の国民皆保険制度は世界に誇るべきものであり、この制度を何としてでも受け継いでいかないといけないのだと確信した。メンバーの一人が先生に、日本では国公立病院の方が先進的な治療を受けられると話すと、少し不思議そうな顔をなさっていた。

学内のオープンスペースで昼食をとった後、キャンパスで行われた **Surgery Session** に参加した。このセッションはなんと、外科学の教授である **Dato Dr. P. Kandasami Palaya** が担当なさった（**Dato** というのは、マレーシアの称号で、州の首長から社会的貢献を評価されたことを示す）。マレーシアの厚生労働省の諮問委員も勤めていらっしゃるという先生は、非常に威厳のある風貌をお持ちで、私たちも襟を正して実習に参加した。そういった空気に反して、教えて頂いた内容は本当に基本的で、医師を目指す者にとって必須ともいえるものだった。まず、机の上にぴんとはったゴムひもと、普通のひもが置いてあり、ゴムひもをひもで縛る練習をした。普通にひもを結ぶだけではなく、それとは逆向きにもう一度繰り返して独特な結び目を作る「男結び」である。これを何度か練習した後、今度は同じ結び方を、手を使わずに手術用ピンセットを使って実践してみる。どの手をどこに持っていくのか、初めは非常に混乱したが、慣れてくるうちにあまり考えなくても手が動くようになった。これができるようになると、鶏肉の皮に大きな傷が入ったようなものが配られ、これを手術用の糸で縫合してみよ、と言われた。傷口にぴったりと結び目が来るようにするのは非常に難しかった。実は早期臨床体験実

習の時に手術を見学した際、先生方がピンセットと糸を使って手際よく傷を縫い合わせているのを見て、そのやり方が前々から気になっていた。今回この体験をして、外科医の先生方は枚挙に暇のない数の練習を積まれて、あのような手早い操作ができているのだと思い知らされた。最後に、一回ずつ糸を切らずに連続して傷を縫合していく **continuous** と呼ばれる手法を体験した。手を動かしていると頭が真っ白になりやすいが、落ち着いて糸の行くべき場所を考えると自ずと答えは見えてくる。これをクリアした後の達成感は大きかった。

セッション終了後、IMU の学生が、再び病院を案内してくれた。先ほど案内してもらった小児科病棟は 2010 年に新しくできたものであり、本館は築 40 年を越しているということだった。確かに建物全体に古く、病室の隣にあるタイル張りの台所など、少し汚れが目立つところも多かった。また、昼間は病室に照明がついていなかった。それ以外に、整形外科病棟で籠状の金属で足を固定している光景は、見ていて痛々しかった。その他、CT 検査室では何十年も前から日本発の技術を使っていると聞いた。ところで、病院を回っていて、非常な違和感を覚えたことがあった。上の階から、一般外科、整形外科、眼科、婦人科、病理検査室、耳鼻科、循環器科…などと続いていくのだが、日本の病院において極めて大きな権力を持つ「内科」がほとんど存在しないのである。確かに、先ほどのセッションの際も、**What do you want to do in the future, GP or surgeon?** と聞かれていた。内科医は、**General Practitioner**（家庭医）とほぼ同じような扱いにまとめられてしまっているのである。日本の医学の中核をなしている、研究→創薬という流れはないのだろうかと考えると、少し寂しくなった（マレーシアの総合病院には内科のあるところも多いが、少なくとも日本に比べると、外科に対して扱いが軽いのは事実である）。

さて、大学のメイン・キャンパスに戻り、軽めの夕食をとった後は、**Cultural Night** というイベントが行われた。マレーシアには中国系、マレー系、インド系の三民族が混在しており、それぞれの文化を一夜で体験するべく IMU の学生側が企画したものである。最初にマレー系の出し物として、**dikir barat** と呼ばれる民族音楽の演奏があった。20 人くらいが前に出て、声を合わせて踊るのだが、彼らの声の迫力にただただ圧倒された。人が声を合わせるだけで、何かしら得も言われぬパワーが生まれてくるような気がする。ちなみに、音楽のメロディー自体は明るいが、歌詞は政治や民族問題について謡っているようだ。次に、中国文化の紹介として、切り絵を体験した。赤い折り紙を 8 つに折って鋏でうまく切ることで、漢字の「春」という立体オブジェを作る。最後にインド文化ということで、腕にタトゥー風の模様をペンで書き合うということを行った。ペン（日本でお菓子を作るときの「チョコペン」と言った方が近い）から出る液体が乾いた後に水で落とすと、皮膚にきれいな模様が浮かび上がる。今から考えると不思議だが相当盛り上がり、夜の 11 時半過ぎまで誰かが何かしらの模様を書いていた。0 時近くなって大学の部屋を出ると、IMU キャンパス内の大きな吹き抜けに学生が大勢集まって、新

体操の練習をしていた。本当にこの人たちは元気だなと感じた。

8月24日

この日、午前中は大学での実習であった。まず、21日に見学させてもらった1Fのシミュレーターで、いくつか手技の練習を行った。初めに、23日に行ったのと同じ採血の練習、次に二人一組になって心電図をとる練習、最後に聴診器によって血圧を測る体験をした。採血では、腕の血管の走り方から、針を刺して最も痛くない箇所を見つけるのが難しかった。注射器を出す操作の途中に、私が誤って指に針を突き刺してしまうというアクシデントもあり、安全には改めて気を付けないといけないなと思った。心電図の練習は、生理学で理論的な話（アイントローベンの三角形）を扱っていたので頭に入りやすかった。第一肋骨から指を下におろしていき、第五・六肋骨の間の部分を探り当てる作業がある（胸部誘導）。特に難しいわけではないのだが、目の前に人がいる中でよどみなく作業をするのは意外と大変だった。血圧は、これも生理学で導入を聞いていたのでとっつきやすかったが、聴診器を移動させた時の雑音と、血管の雑音を区別するのが極めて難しかった。これ以外にも、子宮頸がんの診断を練習するシミュレーターを使う予定だったのだが、時間不足のため見学だけで終わってしまった。

次に、図書館に場所を移してセッション（Dr Htar Htar Aung）があった。IMUの図書館には学習用の博物館が併設されていて、そこには体の中のあらゆるシステムの模型や、骨の標本が展示されている。学生は勉強中に疑問に思ったことがあるといつでもそこに行って、三次元的に内部構造に文字通り「触れる」ことができる。これは、正直に言って羨ましいと思った。今回のセッションは、この博物館の中で行われた。血栓ができたと思われる患者の既往歴から、体のどこの動脈を触診すべきかを理論的に考えるという内容であった。上半身、下半身の血液の流れが詳しく書かれた図を見ながら、人体模型に血栓のできやすい場所を印付けしていくという作業を繰り返した。解剖学をまだ日本で習っていなかったため、解剖用語をほとんど理解できなかったのは非常に残念である。

大学を出た後は、Forest Research Institute Malaysia (FRIM) という場所に向かった。これはマレーシア環境省直轄の研究施設で、言わば人造の熱帯雨林である。現地のガイドの方に案内してもらいながら、一時間ほど森の中をウォーキングした。途中の池にはピラルクが泳いでいたり、大木に寄生して（巻き付いて）養分を吸い取る植物があったり、熱帯地方らしい独特で複雑な生態系が育まれているのが感じられた。医学部の学生だということで、薬草として古来から用いられている植物についても説明を受けた。この日はこれ以降、夜にかけて、バスでペナン州に向かった。ペナン州は町全体が世界遺産に指定されているマレーシア随一のリゾート地で、「東洋の真珠」と言われているほど美しいということである。貸し切りバスに揺られること4時間、着いた頃にはあたりはすっかり暗くなっていた。屋台でペナンに固有の食事を頂いた後、ライトアップがきれいなことで有名な Avatar Secret Garden（2009年の映画「アバター」の世界観を

表現している公園)を一周し、海辺にあるコテージのような宿泊施設に向かった。

8月25日

この日は、一日中ペナン州観光にあてられた。初めに、**Penang Hill** という、ペナン州の代表的な観光地に行った。これは、州を代表する小高い山であり、地上からは高速ケーブルカーが出ている。展望台からはペナンの街並みだけでなく、海の景色が一望でき、晴れていたため遠くにはインドネシアも見ることができた。次に、**Kek Lok Si** (極楽寺) と呼ばれる、伝統的な仏教の寺院に連れて行ってもらった。寺に入る前に何気なく池を見ると、100匹はいるカメが所狭しと泳いでいて驚いた。この寺院の仏塔は、中国式の八角形の基礎、タイ式の層、ビルマ式の屋根を持ち、大乘仏教と上座部仏教の調和を象徴しているということだ。このようなところにも、多民族国家マレーシアの特徴を感じることができる。内部の装飾や仏像の形などは日本と違うところが多かったが、途中の通路のところでお坊さんが托鉢しているのを見て、根底に流れる精神は同じだと感じた。日本への帰国が近づいていたので、帰りのフライトの安全を祈願した。

この後は昼食をとり、土産物屋に立ち寄った後、海の見える場所で写真撮影がてら休憩をとった以外はほとんどバスの中で過ごした。この日中にクアラルンプールに帰着しなければならなかったからである。悪いことに、交通渋滞のためバスの到着は遅れに遅れ、普段4時間かかる道を7時間かけてホテルまで帰った(この辺りは、学生が主体となって予定を組む **AMSEP** の弱点が出ている)。従って、この日の午後の思い出は、バスの中で **IMU** の生徒を交えて、(時には流行している音楽を歌いながら) 語り合ったことがメインになっている。マレーシアの学生の一部が、日本のアニメなどに興味を持ったところから自主的に日本語の勉強をしていたのには驚かされた。そのうち一人には、「信号機の緑色をなぜ日本では青なのか」などと聞かれ、こちらの方が考えさせられた。日本の食文化などにも造詣が深く色々な話が弾んだが、日本人発の技術である **iPS** 細胞はあまり知られていなかったようで、少し寂しかった。

8月26日

この日の午前は、クアラルンプール郊外の **Islamic Art Museum** を見学した。博物館の常設展では、モスクに代表されるイスラーム建築の歴史が、レプリカを使って順を追って展示されていた。博物館自体の建築もイスラーム風の壮大な屋根がついたものであった。1,000年以上前に読まれていたコーランや、儀式に使われていた用具などもたくさん展示されていた。しかし、今回ここに来た目的は、イスラーム医学に関する特別展であり、医学の父と呼ばれるイブン＝シーナーから始まる医学史の系譜がわかりやすく展示されていた。10世紀ごろからの、医学の教科書や薬壺なども系統的な展示が見られた。現在、医学研究の世界で派遣を握っているのが欧米であることに間違いはないが、7～10世紀、十字軍遠征によりイスラームの貴重な遺産が失われる前に、循環や解剖に関する理論を欧米に先駆けて打ち立てていたのが、イスラーム諸国であることは決して忘れるべきではないと思った。

午後は、マレーシアの文化を体験する小さな施設に向かった。ここまで車で来る途中、IMU の学生から、マレーシアの民族差別のことを聞かされた。曰く、マレーシアでは中国系の華僑がビジネスで成功して財をなしたため、マレー系の活躍を応援したい政府としては頭を痛めているのだそうだ。政府のとった方策として代表的なものがブミプトラ政策で、政界や官界においてはマレー人が優位になるように調整するというものである。大学でも似たようなことは行われているようで、マレー人に対しては大学の入学基準や、留学を推進する基準も甘いということだった。実際、マレー人の華僑に対する嫌悪を肌で感じた場面がいくつかあり、そのうちの一つとして、食事中に自分が即席で覚えた中国語で「おいしい」と言ったらマレー人の学生が「私は中国語が嫌いだから、そういうことを話さないで」と言ってきたことがあった。これを思い出しながら、民族問題というのは本当に根が深いのだと思い知らされた。

話を文化施設の方に戻す。ここでは、**Batik** と呼ばれる東南アジアで有名な染物と、**Teh Tarik** という甘い紅茶を作ることを体験した。**Batik** の方は、白い布に絵筆で色をつけるだけの簡単なものだが、メンバーによって書き方に差が出て非常に盛り上がった。**Teh Tarik** の方は、紅茶の入ったボトルと甘いコンデンスミルクの入ったボトルを混ぜ合わせ、何度も流し込みあうというもので、こちらもなかなか面白かった。

これが最後のプログラムとなり、夜には大学で閉会式が執り行われた。最初に、学生によるヒップホップダンスのパフォーマンスと、日本語で「拝啓～十五の君へ」の演奏があった。どうも、こういった式典では、どんなものであれ必ず何かしらのパフォーマンスを用意するのがマレーシアのしきたりのようである。その風習に乗って、という訳ではないが、これほど暖かい歓迎を受けておいて何もしないのは罪悪感がある、ということで、即席で英語の原稿を書き、グループ責任者として5分間ほど時間をもらって感謝のスピーチをした。受け入れられるか不安だったが、スピーチの間に何度も拍手が起きたのを聞き、心からやってよかったと思った。閉会式が終わった後は、現地の学生がこの時のために作ってくれた、**IMU*OU** と書かれたモニュメントを囲んで、全員で今週の思い出について話し、別れを惜しんだ。

4、成果

「1、概要と目的」の項で、今回の留学の目的が4つあると述べた。順に、達成できたかどうか見て行くことにする。

(1) 病院見学や講義の聴講を通して医学知識の幅を広げる

IMU は臨床医学に特化した大学ということで、手術練習を含む手技の体験を非常に多くさせて頂いた。そのほとんどが日本と共通のもので、医師になるには必須のものであった。また、心筋梗塞の授業や博物館で行われたセッションでは、来院した患者の情報について見るべきポイントや、行うべき診断を、4回生の臨床科目に先駆けて教えて頂いた。さらに、中国医療やカイロプラクティックの講義では、日本の学术界に身を置い

ていると疎遠になりがちな分野に触れることができた。最後に、病院見学では、海外の病院の雰囲気を感じることが出来、先生方と英語でディスカッションすることもできた。これらの内容は、今後の授業や実習に参加していく上で必ず実になると確信する。このようなことから、この目標は達成できたと考える。

(2) 医学教育や医療制度の違いを学ぶ

医学教育に関しては、基礎医学から臨床医学へという日本のシステムとは異なり、臓器ごとに基礎・臨床いずれも扱うというやり方に触れることができた。また、1年次から診断や手技などの内容をカリキュラムに多く取り入れるやり方を直に見ることで、逆に日本で行われている基礎医学教育の重要性を認識できた。また、患者を模した人工知能の存在を知り、日本での医学教育とITの親和性について深く考えるきっかけとなった。医療制度に関しては、病院見学の際の公立病院と私立病院の違いの話など、随所に隠された印象的な内容を身にすることができた。従って、この目標も達成できたとしてよいだろう。

(3) 海外の医学生との英語を通じた交流を行うことで、国際的な人脈を広げるとともに英語の運用力を高める

空港の送迎から現地での授業、観光や食事に至るまで、今回のプログラムでは現地の学生が常に一緒についていた。最初はぎこちなかったものの、すぐにメンバー全員が、自発的に彼らとの英語での交流を楽しむようになった。IMUは、学内で英語を公用語に指定している大学であり（多民族国家マレーシアの宿命である）、現地の学生も英語学習に対する意識が高かったのも大きい。今回得た人脈が必ずしも将来のキャリア形成に直接的に役立つというわけではないが、このような異文化間の交流をした経験が、グローバル化の進む医学界において肝要になってくることは火を見るより明らかである。よって、この目標も達成されたと言える。

(4) 文化施設等の見学を通して教養を深める

プトラジャヤやスリア KLCC では、大都市が備える美しさや文化的ランドマークの必要性について思いを馳せた。Royal Selangor Pewter House では、英国植民地であったマレーシアの貿易史を垣間見ることができ、Islamic Art Museum では、医学のパイオニアたるイスラームの歴史を生で感じることもできた。観光や食事などでは、その国の文化を表面的に感じるのみならず、マレーシア人の愛国心や物の考え方を含めて重層的な捉え方をすることができた。「教養」と言ってしまうと、目に見えない少し胡散臭いもののように見られることがあるが、職についてからの人間の厚みを決める重要なファクターであると確信する。従って、この目標も達成できたと考える。

5、今後の抱負

(1) 来年1月に行われる受け入れを成功させる

これは交換留学プログラムであり、受け入れを終えて初めて完結するものである。従っ

て短期的な目標としては、3か月後に控える IMU 学生の受け入れが挙げられる。現在 AMSEP を通じた受け入れは大阪大学公式のものではなく、受け入れ証明書なども出るものではないことが残念だが、毎年非常に多くの先生方にご協力頂いて成り立っている。今回の留学で我々が得た成果や印象と、同じくらいの大きなものを持って帰ってもらえるよう、グループ責任者として調整したいと思う。

(2) 英語に対する障壁をさらに下げる

(2) と (3) は中期的な目標である。私はこのマレーシア留学以前に海外に行ったことがなく、英語や海外との交流に対して潜在的な苦手意識があった。しかし、今回このプログラムに参加して、外国人との交流というものはそれほど英語が完璧でなくても十分可能であるということに気が付いた(むろん、文化的な引き出しは持っておかないといけないが)。また、マレーシアでは母語で書かれたジャーナルはなく、全て英語で医学を勉強するという話から、我々日本人が、日本語の論文の存在に甘えて英語を読むことを嫌がっていては意味がないと考えるようになった。現在私は研究室に所属しており、外国人の大学院生もいれば英語の論文を読む機会もある。このような考えを忘れず、今後の活動に励んでいきたい。

(3) 基礎医学をこれまで以上に学習する

今回、臨床医学を重んじる IMU に留学して初めてわかったのが、基礎医学の重要性である。確かに、彼らは若くから医療器具を扱い慣れており、手技においても日本の同年齢の医学生よりも一日の長があるだろう。しかし、既に確立された医療技術を練習しているだけでは、新しい症例に対応できないし、何より学問としての発展がない。彼らの姿を見て、日本の基礎医学重視のシステムがどれだけ新しい医学を作っていくのに重要かを思い知らされた。2～3回生の、基礎医学系の授業に積極的に参加するモチベーションになった。

(4) 国際性豊かな医師になる

これは長期的な目標であるが、医師になってから、患者さん(もちろん外国人の方も含む)を科学的な目でばかり見るのではなく、経済的・社会的な視点からも見れるようになりたい。医療制度や、医療と社会のかかわりといった問題は、日本にいただけでは見えにくく、海外に行くことで初めて自分の中で明るみに出る。今回の経験だけではなく、もっと多くの海外経験を積んだり、勉強をして教養を深めたりして、複眼的な医師になることが私の最大の目標である。

6、謝辞

今回の渡航に関わって下さったマレーシア、日本両国の全ての方々に感謝致します。特に大阪大学名誉教授の岸本忠三先生、推薦状を書いて下さった環境医学教室教授の祖父江友孝先生、大阪大学医学部教務室の方々には厚い感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

平成30年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

渡航先及び受け入れ機関名
マレーシア クアラルンプール
International Medical University

医学部医学科 2年

氏名 N. N

1. スケジュール

- 8月21日 クアラルンプール国際空港着、クアラルンプール探索
- 8月22日 文化研修（バトゥ洞窟、ピューター博物館）
- 8月23日 Seremban Hospital 見学、Surgical Workshop、Cultural Night
- 8月24日 メディカルセッション、文化研修（トレッキング、ペナンの寺院見学）
- 8月25日 文化研修（CHEW JETTY、Kek Lok Si）
- 8月26日 文化研修（イスラム美術館、美術ワークショップ）
- 8月27日 クアラルンプール国際空港発

2. 目的

IMU での講義、実習及びその付属病院での見学にてマレーシアの医療の現状を学び、マレーシアの生徒との交流を通して国際交流のスキルを向上させ、また現地の文化を体験することで異国の文化との接し方を学ぶこと。

3. 活動内容

プログラムの概要

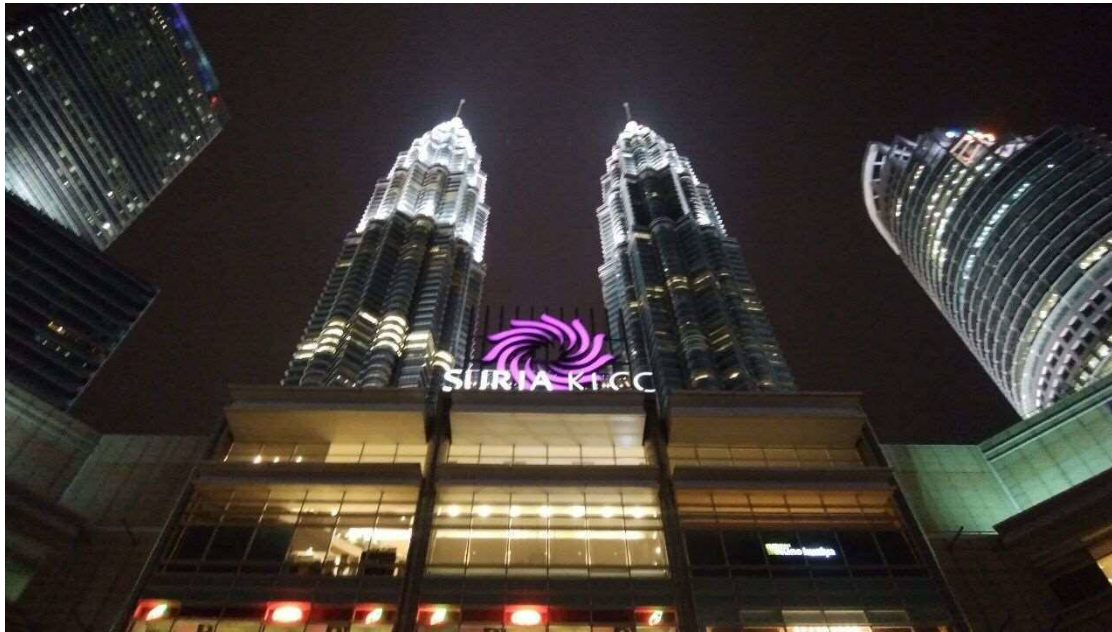
このプログラムは、AMSA (Medical Students' Association) というアジアの医療系学生の国際学生団体による AMSEP (Asian Medical Students' Program) という医学部間での交換留学です。私は8月21日から8月27日までの期間にマレーシア、クアラルンプールの IMU (International Medical University) に留学し、そこで講義の受講や実習、病院見学や生徒との交流、そして文化施設の見学をおこないました。なお、2019年1月にこちらでも IMU の生徒の受け入れを行います。

プログラムの詳細

・ 8月21日

1. クアラルンプールの探索 (Petronas Twin Tower)

僕は途中参加であったため、Petronas Twin Tower を外部から眺めるだけでしたが、想像以上の迫力でした。下から見上げると首が痛くなるほど高く、またそのイスラム教のモスクをイメージしたそのデザインは印象的でマレーシアの経済における発展と文化が見て取れました。



・8月22日

1. バトゥ洞窟

バトゥ洞窟はヒンドゥー教の聖地であり、敬虔なムスリムが袈裟に裸足で参拝している一方でラフな格好の観光客もたくさんみられました。洞窟の入り口にある神像は世界一の大きさであり、純金でコーティングされていて日本の仏教との違いが多くありました。



2. ピューター博物館

ピューターとはスズ、アンチモン、銅の合金のことで博物館にはピューターをはじめとするマレーシアにおけるスズ鉱山や工芸品の歴史が展示、説明されていました。マレーシアがスズの産出国であることは知っていましたが、その鑄造や工芸品も歴史的に発展していたのは当たり前かもしれませんがしりませんでした。



・ 8 月 2 3 日

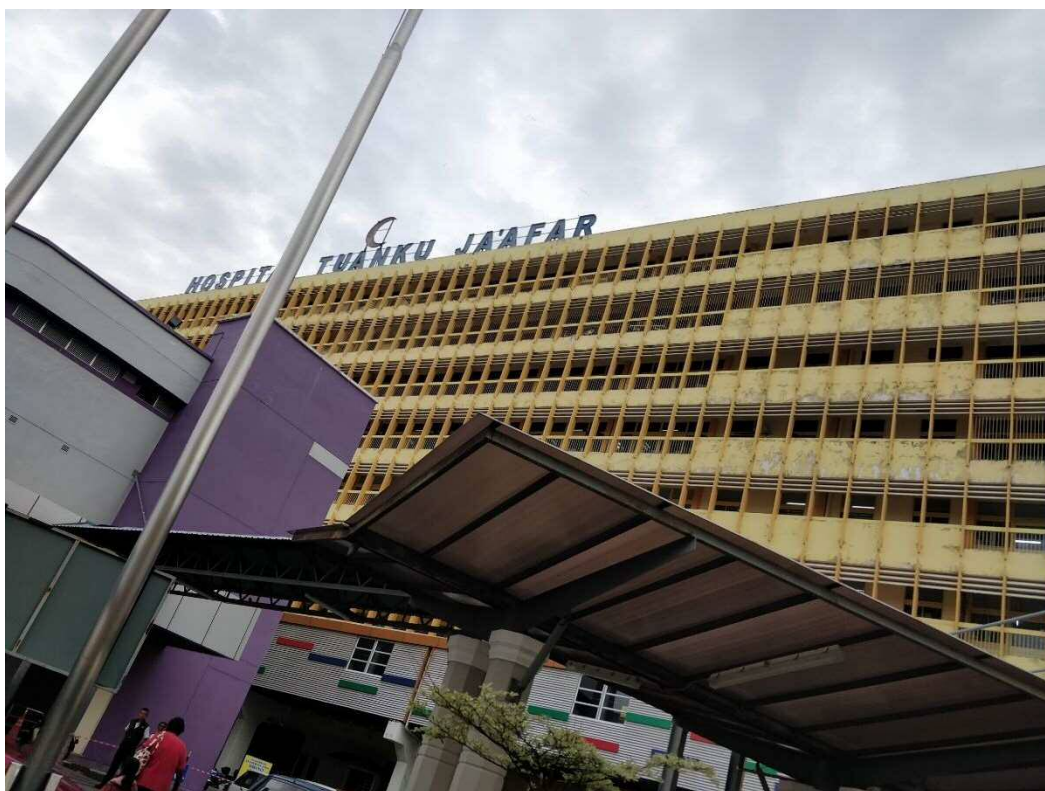
1. Seremban Hospital 見学

私たちは Seremban Hospital とそれに隣接する IMU のキャンパスを見学しました。

まず IMU のキャンパスですが、年中温暖な気候のためリゾートのように開放的な作りでした。図書館は大阪大学のものと比べコンパクトでしたが大学の名前の通り英語の書籍のみがおいてあり、**Essential** 細胞生物学の原本もあったので学習していることは日本とそれほど大差がないのかと思いました。また実習に用いる機械を内蔵したマネキンも見せてもらいました。別室のコントローラーを使うことで血中酸素濃度の表示を変化させたりさらにマネキンに症状を話させたりと高性能なものでしたが実際にはほとんど使わないとのことでした。

次に病院のほうですが総合病院であり、緊急外来も備えていました。すべての診療科を見て回りましたが、部屋はそれぞれ男性と女性に分かれており各所に女性の警備員が座っていて日本との環境の違いがみられました。最も印象的であったのは整形外科で、イリザロフ

法による治療を多くの人が受けていました。また小児科では未熟児などにブルーライトと照射することで代謝を上げる治療も行われており、国によって主流な治療も異なることを実感しました。



2. Surgical Workshop

Surgical Workshop では傷に見立てた日本のゴムと毛糸を使用して男結びの練習を行いその後実際に鶏肉の傷口を縫う演習を行いました。初めて手術に使用する針やハサミといった器具に触ったため最初は戸惑いましたが、日本でもこういった実習を行うのが待ち遠しく感じられました。

3. Cultural Night

マレーシアの人口の大部分はマレー人、華僑、そしてインディアンです。この催しではマレー人の伝統的な歌と踊り、華僑の切り紙、そしてインディアンの腕に染料で柄を描く文化の体験を行いました。マレー人の踊りは盆踊りに通ずるところがあり、どこか懐かしく感じられました。



・ 8月24日

1. メディカルセッション

IMU の教授の方に講義をしていただきました。足の痛みを訴える肥満体形の女性の症例について意見を出し合い、その後に模型を使用して手や足、首の触診に使用する動脈を教わりました。まだ知識の乏しい分野だったので講義を聞き取るのは困難でしたが人体模型のおかげで何とか理解できました。



2. 文化研修（トレッキング、ペナンの寺院見学）

トレッキングではクアラルンプール郊外の自然公園に行きました。植民地時代に伐採されてしまった個所に人工的に作られたもので、熱帯雨林の保全、調査を目的としたものだそうです。またこの日に訪れたペナンの寺院は夜間のライトアップを始めたためにここ数年で人気となった観光スポットで、LED と光ファイバーを使用した光景は幻想的でした。

・ 8 月 2 5 日

1. CHEW JETTY

CHEW JETTY はマレーシアのペナン島にみられる伝統的な水上集落であり、同姓の一族が一つの栈橋を中心とした集落を構成しています。一般的な街並みの中から突然現れたので驚きました。

2. Kek Lok Si

漢字では極楽寺とかく仏教の寺院で、日本の寺院とは異なり、とても色彩豊かでした。最も特徴的なのは巨大な仏塔で、下部が中国様式で、中部がタイ様式、上部がビルマ様式のデザインからなり、多民族からなるマレーシアを象徴しているようでした。



8月26日

1. イスラム博物館

モスクを模した建物の一階にはイスラム教圏（シルクロード）で発達した医学の展示があり、二階には様々な時代、国のモスクの模型と工芸品の数々が展示されていました。宗教は文化だけではなく学問も伝え広めていくものなんだと再確認しました。

2. 美術ワークショップ

Green apple というカフェでマレーシアの伝統的な染め物の体験を行いました。またマレーシアの練乳を加え泡立たせる紅茶の淹れ方も体験しました。

4. 成果

この交換留学において痛感したのはIMUの医学生と大阪大学の医学生の英語スキルの違いです。IMU そのものがそういった特色を持つ大学ではあるのですが、それでも互いの発信する情報量の偏りが感じられ歯がゆい思いをしました。講義が全て英語であったり図書館の蔵書が英語であったりと環境の違いはありますが、その環境に自分が置かれていたとしても果たしてそこまで英語を習得していたか怪しいと思うので態度を改め語学学習に取り組んでいきたいです。

また病院見学ではその実際に行われている治療が考えていた以上に日本のものと異なっていたので驚きました。イリザロフ法など、日本ではもう主流ではない治療法も盛んに行われており、設備の状況や技術力によって最善の治療法も変わるのだということを学びました。

5. 抱負

この交換留学は阪大の教務の方々や台湾の学生、先生、そして岸本忠三名誉教授の協力無くしては成功しえないものでした。どうもありがとうございました。皆様のご協力を無駄にせぬよう、この交換留学で得たものを十全に活かして役立てていきたいと思います。また一月においては大阪大学の名に恥じないよう IMU の学生を万全を期して受け入れたいと思います。

平成 30 年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 3 年

学籍番号 *****

氏名 U. Y

以下では、表紙に記載した「3. 今回の海外活動により得られた成果・感想等」について報告します。

1. スケジュール

詳細な活動内容については第 3 項「活動内容」で記述します。

国際生理学クイズ大会の参加より引き続いてマレーシアに滞在しておりました。

2018 年 8 月 20 日 文化研修 (Sunway Putra Mall、Putrajaya)

8 月 21 日 大学 (International Medical University、以下 IMU と省略します) の見学

講義 (Myocardial Infarction について)

講義 (Chinese Medicine、Chiropractic について)

文化研修 (クアラルンプール散策)

8 月 22 日 文化研修 (Batu Caves、Royal Selangor Pewter、

Cheras Taman Connaught Night Market)

8 月 23 日 病院見学 (Seremban Hospital)

実習 (手術の手技について)

文化研修 (Cultural Night)

8 月 24 日 実習 (解剖学に基づいた Physical Examination)

文化研修 (Forest Research Institute Malaysia、Penang Avatar Secret Garden)

8 月 25 日 文化研修 (極楽寺、Penang Hill、Traditional Clan Jetties)

8 月 26 日 見学 (マレーシア・イスラム美術館)

文化研修 (マレーシア文化体験)

8 月 27 日 クアラルンプール国際空港発

8 月 28 日 関西国際空港着

2. 目的

まず、マレーシアの医学生や医師と接することで友好を深め、そして国際感覚を養うことです。そして、マレーシアの医療や文化を知り、それを日本のものと比較することです。さらに、交流を通してマレーシアの医学生にも、日本の医療や文化を知ってもらうことです。

3. 活動内容

概要

このプログラムは、AMSA(Asian Medical Students' Association)という国際的な医学生の団体の主催する AMSEP (Asian Medical Students' Program)という、アジアの医学部間での交換留学です。AMSEP のプログラム内容は、臨床実習か pre-clinical の実習かの別を問わず、5日から10日の期間の留学および相手国からの医学生の受け入れの2つとなっております。

今回、私たちは2018年8月20日から27日までの期間でマレーシアのIMU（国際医療大学）に留学しました。そこで、講義の受講、病院の見学、臨床的な実習を行い、そしてマレーシアの文化施設の見学も行いました。なお、2019年1月6日から13日までの期間で私たちがIMUの医学生を受け入れます。

詳細

スケジュールに沿って記します。

8月20日 文化研修 (Sunway Putra Mall、Putrajaya)

Sunway Putra Mall（サンウェイ・ブトラ・モール）は、エジプトをモチーフにしたショッピングモールで、ここでもマレーシアの多様性を感じることができました。マレーシアは多民族国家でマレー系が67%、中国系が25%で、インド系が7%、その他が1%となっています。この多様性と、どの文化でも受け入れる雰囲気を感じることができました。

Putrajaya（プトラジャヤ）はクアラルンプール郊外にある、政治や行政の中心地である。さまざまな官公庁を見学したほか、Putra Mosque という、ピンク色の美しいモスクを見学し、イスラムの文化を体感することができた。



Putra Mosque にて

8月21日 大学（IMU）の見学

医学・中国医学・整体の3つの医療系の学科しかない小さな大学で、基本的に1つの建物しかありませんでした。（ただし関連病院は多数あるとのことでした。）また、大学はショッピングモールの建物を再利用しているとのこと、構内にエレベーターがあったことが印象的でした。

いくつかの教室を訪れることができましたが、特に印象的なのはシミュレーションルームで、ここでは実際に患者に臨床手技を行うことができます。後にも記しますが、マレーシアでは座学よりも臨床手技を重視していて、より実践的な授業となっております。



シミュレーションルームにて。さまざまな手技を実践することができる。

講義（Myocardial Infarction について）

医学部の学生が受ける授業を一緒に受けさせていただきました。先生はとても気さくな方で、最初に私たち留学生を紹介してくださり、また授業中も何度か当ててくださるなど、ここにも日本との違いを感じました。

また、授業は心筋梗塞 myocardial infarction についてで、大阪大学での授業と比べると出席率も高く、また授業を聞いている割合も高く、海外の医学生の真面目さを感じました。



講義にて。

講義（Chinese Medicine、Chiropractic について）

IMU には、医学科のほかに、中国医学（漢方）Chinese Medicine や整体 Chiropractic を学ぶ学科があります。ここで中国医学、整体の学科を訪問し、実際に体験することができました。

まず整体の学科を訪問しました。ここでは、整体の歴史から始まり、実際にどうやって診察・診療を行うのかということを教えてくださいました。そして、実際に私たちがお互いに整体の手技を実践しました。ここでは、整体は経験則だけでなくかなり科学的に行われていることを感じることができました。また、整体は医学とは別の体系になっていますが、それを医学と統合できないかとも思いました。



Michael Thomas Haneline 教授が講義してくださいました。

文化研修（クアラルンプール散策）

クアラルンプールの散策を行いました。マレーシアは列強諸国に植民地化された歴史を持っていて、具体的にはポルトガル、オランダ、イギリス、日本、イギリスの順で植民地支配を受けていました。この散策では、マレーシアの中心部を訪れただけですが、この重厚な歴史を感じることができました。例えば、マレーシアの独立広場という場所の周辺では、イスラム教のモスク、イギリスによって作られたキリスト教の教会、インドのムガル様式の建物などが混在していて、その歴史を感じることができました。



独立広場方面を見下ろして

8月22日 文化研修（Batu Caves、Royal Selangor Pewter）

この日は多くの文化研修を行いました。

まず Batu Caves（バトゥ洞窟）はヒンドゥー教の聖地で、大きな仏像や寺院がありました。また、ここには野生の猿が多く生息しており、人間と動物の共存を感じることができました。

ここではヒンドゥー教の祭り、タイプーサムの時には、信者たちが体のあちこちに針や鉄串を指して行列するとのことです。



Batu Caves にて。大きな大仏がある。また、階段の続く先が洞窟となっている。

次に、Royal Selangor Pewter（ロイヤル・セランゴール工場）の見学ツアーに参加しました。クアラルンプールは世界的な錫（スズ）の生産地で、ピューターpewter とはその錫を原料にして作られた製品のことです。マレーシアにおける錫の生産の歴史から、錫の性質、そして実際にピューターを作っている様子まで見学し学ぶことができました。



見学の様子

8月23日 病院見学（Seremban Hospital）

この日はメインのキャンパスからは少し離れた病院（Seremban Hospital）を訪問しました。ここではまず、Erwin 先生から小児科に見学をさせていただきました。子供が遊ぶこと

のできる遊具があったり、家族と過ごすことのできる部屋があったりするなど、いたるところに配慮を感じました。



病院の内部は写真撮影が禁止で、外装の写真しかありません。

実習（手術の手技について）

Seremban Hospital にて、引き続き、手術の手技、具体的には縫合の練習を行いました。Dato 教授から講義を受けた後、鶏の皮を用いて、実際に縫合の練習を行いました。様々な方法の縫合があり勉強になったと同時に、IMU の実践を重んじる姿勢に改めて感動いたしました。



縫合の練習のセット

文化研修（Cultural Night）

IMU のメインのキャンパスにて、Cultural Night というイベントがあり、ここではマレーシアの文化を実際に体験することができました。特に印象的だったのは Henna（ヘナ）という一時的なタトゥーで、インド系マレーシア人の装飾を身をもって知ることができました。



8月24日 実習（解剖学に基づいた Physical Examination）

この実習も印象的でした。日本では生理学や解剖学の授業では知識をただ覚えるだけで、せいぜい病態の理解につなげる程度でしたが、この授業では解剖学的な知識をもとに、症状からの診断を行う練習をしたり、また臨床検査をおこなったりして、ここでもマレーシアでの医学部の実践を重んじる姿勢を感じることができました。



Htar Htar Aung 先生の指導のもとに

文化研修（Forest Research Institute Malaysia、Penang Avatar Secret Garden）

Forest Research Institute Malaysia（マレーシア森林研究所）では、マレーシアの熱帯雨林のトレッキングを行い、熱帯雨林を肌で感じることができました。温帯の日本と異なり、熱帯のマレーシアでは背の高い木が多いなど、違いを感じることができました。



ガイドの方を囲んで

次に、Penang Avatar Secret Garden というのは中国系の寺院で、丘のふもとから頂上にかけて建てられていて、自然と一体化している様が美しかったです。また、夜に訪れたためライトアップもされており、一層美しかったです。



記念撮影

8月25日 文化研修（極楽寺、Penang Hill、Traditional Clan Jetties）

この日は文化研修および移動時間となりました。

まず、極楽寺は仏教の寺院で、中国・タイ・ビルマの3つの様式が混在していることが特徴です。ここにもマレーシアの文化の多様性とその懐の広さを感じることができました。



様々な様式の混在するパゴダ。

この日は次に、Penang Hill（ペナン・ヒル）を訪れました。ここでは、文字通り丘の上から、今回訪れたペナン島を一望することができました。

ここペナン島はイギリスが1786年にマレーシアに初めて入植した地で、東西貿易の中継地として発展してきた歴史を持ちます。それにより、西洋、イスラム、中国、ヒンドゥー文化が共存する独特の雰囲気をもつ街並みが形成されました。この深い歴史を反映した、味わい深い景色を見ることができました。



Penang Hill からの景色（兼集合写真）

そして、最後に、Traditional Clan Jetties（同性一族の栈橋）というのを訪れました。ここは中国人移民の水上部落で、同じ姓を持つ人どうしが1つの栈橋を作りそこに住んだことから、この名があるそうです。

ここでは、日本では見ることのできない、水上に住む人たちの暮らしを垣間見ることができました。



Traditional Clan Jetties にて記念撮影

8月26日 見学（マレーシア・イスラム美術館）

この日はクアラルンプールにある、マレーシア・イスラム美術館を訪れました。ここではイスラムについての展示があるのですが、医学についての展示もあり、イスラムの伝統的な医学について学ぶことができました。



イスラムの建築についての展示の前にて

文化研修（マレーシア文化体験）

ここでは Batik と呼ばれる、マレーシアの伝統的な文様のある布の、彩色をしました。次に、Teh Tarik という、マレーシア独特のミルクティーの作成をしました。いずれもただ見るだけでなく、実際に手を動かしての体験なので、とても貴重なものとなりました。



Batik の彩色



Teh Tarik の政策

8月27日 クアラルンプール国際空港発

8月28日 関西国際空港着

4. 成果

マレーシアの留学の最大の成果は、マレーシアの医学教育を肌で感じる事ができた点です。マレーシアでは実践的な教育を行っており、それゆえ学生のモチベーションも高かったです。日本では基礎医学の教育が重んじられているので、このマレーシアの医学教育の姿勢からは学ぶものが多かったです。

次に学んだことは、マレーシアの文化の多様性と、その多様性を受け入れる受容性の高さです。今まで述べてきたように、マレーシアは様々な国に支配されてきて、また様々な国・地域からの移民を受け入れてきたという歴史を持っているので、見事に様々な文化が共存していました。日本では移民を受け入れないなどの問題がありますが、マレーシアを見習い、移民の受け入れ等を進めていくべきだと感じました。

5. 抱負

このプログラムでは、阪大の教務・岸本奨学金の関係者のみなさま、マレーシアの学生・先生に大変お世話になりました。受け入れをしてくれた学生は病院さ様々な施設に時間とお金を割いて連れて行ってくれました。また、病院では多くの先生にわざわざ時間を使って案内や説明をしてくださいました。

ここで、まずは今回受け入れてくれた学生を日本受け入れることに全力を尽くしたいと

思います。さらに、次回以降のプログラムにも協力することで、恩を返していきたいと思います。そして私自身は将来、ここで学んだことを活かして、視野の広い、世界で活躍できる医者になろうと決意しました。

6. 参考文献

ダイヤモンド社「地球の歩き方 マレーシア ブルネイ 2018～19」

私は、8月19日から8月27日まで、AMSA (Asian Medical Students' Association) という団体の主催する AMSEP(Asian Medical Students' Program)という交換留学プログラムに参加した。受け入れていただいたのはマレーシアの国際医療大学 (IMU) で、現地の学生に案内していただき大学の医学教育を体感させていただいたほか、病院見学、文化研修などを行った。以下はその報告である。

<日程>

- 8/19 出国、クアラルンプール着
- 8/20 文化研修 (サンウェイピラミッド、プトラジャヤ)、ice breaking
- 8/21 大学見学、講義、文化研修 (クアラルンプール散策)
- 8/22 文化研修 (Batu Caves, Royal Selangor Pewter House)、夜市
- 8/23 病院見学、縫合体験、文化交流
- 8/24 メディカルセッション、FRIM、文化研修 (ペナン島)
- 8/25 文化研修 (ペナン島観光)
- 8/26 文化研修 (イスラム博物館)、クアラルンプール発
- 8/27 帰国

<目的>

マレーシアの医療や医学教育、行われている研究について学ぶ。
現地の医師や学生、住民との交流を通じてマレーシアの文化を体感し、国際的な視点を得ること。

<活動内容>

1. マレーシアの医療、医学教育について

・8/21 大学見学、講義の見学

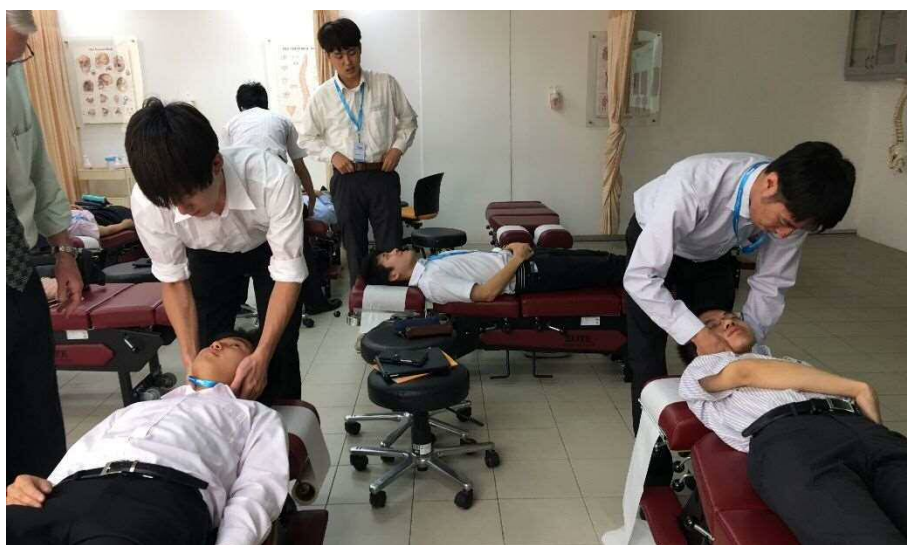
受け入れていただいた大学の main campus (1, 2年生が主に使うキャンパス) を見学した。私立の大学であることもあり、施設は大変きれいだった。主に気になったのは、実技の練習をする設備が充実していて気軽に使いやすく、また実際に多くの学生に使われているということだ。実技の教育に日本よりも力を入れており、低学年から実技のテストも頻繁におこなわれているようだ。十人以下での少人数での実習の授業も多く行われていた。

その後、Ms Jack による 1 回生向けの、心筋梗塞についての総括的な授業を現地の生徒と一緒に聞かせていただいた。英単語を調べながらで、半分ぐらいしかわからなかったが、授業の雰囲気が知れて面白かった。英語で行われている講義を現地の生徒が理解しているのが刺激的だった。

・ 8/21 東洋医学、カイロプラクテイクについて

東洋医学について、Zhou Wen Xin 教授からお話していただいたあと、大学に附属している東洋医学専門のクリニックを見せていただいた。東洋医学は漢方薬、鍼灸、cupping、電気鍼治療などからなる。IMU には専門のコースが 2011 年に設立されているが、医学科の生徒は通常学ばないらしい。お話の後、実際に希望した日本人に鍼、cupping を実演していただき、そしてクリニックの見学をさせていただいた。診察室の種類は 1 種類しかなく、小さな施設だった。

カイロプラクテイク (chiropractic) については、Michael Thomas Haneline 教授からお話いただいた。Chiropractic は、WHO により代替治療として認められている、手技による主に脊椎に関係する疾患に対する療法である。アメリカ、イギリスなどでは専門職として法制化されているが、日本では特に資格なし、民間療法として行われている。これも東洋医学と同様、特別なコースがあり、医学科の学生は通常学ばないらしい。少し講義をしていただいた後、二人一組になって実際に手技を体験した。



・ 8/23 病院見学

見学先の病院は国立の病院で、高学年の生徒が使う校舎と直結していた。このように実習を行う先の病院が複数あるらしい。IMU に附属病院は現在ないが、建設中だそうだ。

1200 床程度の大きさだが、かなり柔軟にベッドの数を増やしているという。混雑す

るとベッド間の仕切りをなくしたりするそうだ。

まず、小児科の Erwin Khoo Jia Yuan 先生に小児科を案内していただいた。小児科の待合室には絵が描かれていて、子供たちの遊び場もあったが安全上の観点から、使用は制限されているらしい。入院ベッドのそばには、図書館や教室があり、常駐の教師もいたが、入院患者用のスペースが全体としてかなり狭いように感じた。小児科は24時間面会できるそうだ。マレーシアには公的な医療保険制度がないこと、私立の病院と国立の病院の差が激しいことなどを説明していただいた。



その後病院全体の案内を4回生の方からしていただいた。まず驚いたのは学生が病院の中をしっかり把握していて、また、ベッドのそばに置いてある記録等を自由に見ることができることだった。この病院では患者のデータはすべてアナログで管理されていて、検査結果などもすべてプリントアウトして患者のそばに置いてある。また、レントゲンのフィルムなどもあちこちに置いてあった。それらを時々開いたり映したりしながら、様々な説明をしていただいた。

日本の病院と違った点はそのだけではない。基本的に病室にはエアコンがなく、エアコンのある病室に入るには追加でお金がいること、内科ではイスラム教に配慮して、男性総合内科、女性総合内科に分かれていることなどが違いとしてあげられる。また、甘い食べ物が多いため糖尿病の患者が多く、それで手足を切断する人も多いそうだ。産婦人科は、別の建物が建つほど大きかったが、それは、イスラム教では避妊ができないため、若い女性の妊娠が多いことが一因とされる。

・ 8/23 授業で行われている実習の体験、縫合体験

4 回生の学生に、気道確保の方法、清潔な状態で採血をする方法を、模型を使って教えていただいた。Main campus と同様、clinical campus にも手技を練習する装置が充実していた。



また、授業で使われる simon とよばれる人形もを見せていただいた。この人形はよく人に似せられていて、聴診器で拍動を聞くことができるし、遠隔操作で拍動を異常にし、学生に緊急時の対応を練習させることができる。拍動以外にも、spO2,などのモニターもついていて、いろいろな場面のシミュレーションを行うことができる。高学年の生徒は、このようなシミュレーション機器で練習を十分に積んでから、病院実習に臨むことができる。



その後、P. Kandasami Palaya 教授に加えて学生の方々に、縫合の仕方を教えていただいた。最初は毛糸で練習してから、鶏肉に入れられた切れ目を縫った。このようなワークショップは高学年の生徒によって低学年の生徒向けにしばしば行われているらしく、

とても分かりやすかった。

・8/24 メディカルセッション

最初に、二回生の生徒（マレーシアでは一般教養を university に入る前の college で行うので、日本の三回生にあたる）に、授業で使っている clinical skills simulation center(CSSC)で採血の仕方、子宮の粘膜の検査の仕方、アナログで血圧を測る方法などを学んだ。施設が充実していること、生徒一人一人が器具の使い方、検査方法を完璧に覚えていることに驚いた。一つの学習内容につき小さな部屋が一部屋割り当てられていた。

その後 Htar Htar Aung 教授に、医学博物館で、実際に様々な模型を見ながら体のそれぞれの部分での脈の取り方を教えていただいた。マレーシアでは人体の解剖が現在できないが、その代わりに人体模型が充実していた。

2. マレーシアの文化について

マレーシアは多民族国家で、主にはマレー系（65%）、中華系（24%）、インド系（8%）の三つの民族で構成されているが、そのほかにも多くの民族があり、100を超える言語が話されている。国全体ではマレー系が過半数であるものの、受け入れていただいた大学は私立の大学であったということもあり、案内してもらった学生は中華系が多かった。（マレー系優遇政策により、国立大学への入学はマレー系の生徒が優遇されており、中華系の生徒が合格するのは非常にむずかしいため。）そのため、現地の学生同士は北京語でコミュニケーションをとっているひとがおおかったが、留学生もいるので英語も使われていた。

気候について、マレーシアの気候は年中温暖で、四季の区別がない。雨期などもなく、ただ、7－9月にかけてはインドネシアで行われる焼き畑農業の影響で気温が高くなり、大気が比較的汚染されているようだ。

食事についても、伝統的な食事として、中華料理、マレー料理、インド料理がそれぞれある。それぞれ何回か連れて行っていただいたが、どれもおいしかった。全体的に辛い食べ物と甘い食べ物が多かった。物価は総じて安かったが、特に食べ物に関してはかなり安かった。

公共交通機関があまり正確に機能していないので、車社会となっていて、道幅は広くて車線も多く、車を持っている学生が多いのも印象的だった。

*文化研修

・8/20 プトラジャヤ

プトラジャヤは非常にきれいに整備された行政の中心地である。様々な省庁の建物が立ち並び、デザイン性の高い建物が多かったのが印象的だった。広い直線の道路の突き当りには首相官邸があるが、その建物がイスラム建築のデザインであること、またその横にピンクモスクというモスクがあることより、マレーシアがイスラム教国家であることを印象付けているようだった。ピンクモスクの中は、決められたところまではムスリムでなくても入ることができたが、お祈りの時間と被らないように入場時間が決められており、また足を露出して入ることができないので入り口で赤いローブを借りなければならなかった。時間外ではあったものの、中ではムスリムの方がお祈りされていた。周りにあるプトラジャヤ湖は人口湖であるらしく、思っていたよりも技術力と経済力のある国だと思った。

・ 8/21 クアラルンプール

大学から電車にのって、クアラルンプールの中心地へいった。ムルデカスクエア、セントラルマーケット、ストリートマーケットを見てから、ツインタワーのある KLCC へ向かった。ムルデカスクエアは 1957 年にイギリスからの独立を宣言した場で、大きな国旗が掲げられ、歴史を感じる装飾もあった。ストリートマーケットではクアラルンプール中心は思っていたよりも都会で、高級ブランド店もあり、物価は日本とあまり変わらなかった。

・ 8/22 batu caves, royal Selangor pewter house, night market

この日はイスラム教の祝日だった。まず有名な観光地である batu caves に行き、長い階段を上って洞窟に入った。ここは観光地でありながらヒンディー教の聖地で、信者の方ははだしで参拝されていた。お供えのお花や寺院の色が派手で、また、寺院をいくつか新たに建設中だったのが印象的だった。

その後 royal Selangor pewter house に行き、合金であるピューターについて説明していただいた。ピューターは錫とアンチモン、銅の合金で、オスカー像にも使われているらしい。お土産物屋さんにあった作品もみなきれいだった。

夜市は毎週水曜日に行われているらしく、とても長く露店が立ち並び、かなり歩いたが半分ほどしか回れなかった。人も多く、道も狭いのでかなり混雑していた。ここでは主にマレーシアの伝統的な食べ物をたくさん安く食べることができた。

・ 8/23 cultural night

マレー系、中華系、インド系に分かれて文化の紹介をしていただいた。

マレー系：マレー系の学生がたくさんきてくれて、マレー系の伝統的な踊りをみせていただいた。

中華系：ペーパークラフトを紹介してもらった。

インド系：伝統的なボディーペイントであるヘナを紹介してもらって、実際に体験させてもらった。かなり強く染まってしまう、模様が帰国後も取れず少し困った。



・ 8/24 FRIM (Malaysia research institute Malaysia)

この施設には人口の熱帯林があり、その中を歩き回ってガイドの方に案内していただいた。日本では見られないような大きな木、大きなアリなどがいた。また、マレーシアの伝統的な植物の利用法なども教えていただけて面白かった。

・ 8/24~25 ペナン島

ペナン島は植民地時代から東西貿易の拠点として機能した、植民地時代の爪痕が今も残る島である。

ペナン島につくと、ナイトマーケットに行き、ペナン島で有名な食べ物をたくさん紹介していただいた。ペナン島は海に囲まれた小さな島なので、海産物を用いた食べ物が多かった。その後アバターシークレットガーデンという海沿いの公園へ行った。

次の日は、ペナン島で一番高い山である pennang hill にのぼってから、極楽寺、姓周橋にいった。

・ 8/26 イスラム美術博物館

とてもきれいな博物館で、イスラム世界の医学、建築物、武器、衣服、工芸品などの展示がされていた。丁寧に説明していただき、ここでしか見られないものが見られて大変有意義だった。

<得られた成果と今後の抱負>

今回の留学を通して学んだこととして、大きく分けて三つのことが挙げられる。

一つ目はマレーシアの医療について、その実情を目の当たりにすることができたことである。大学の教育設備は十分に整っていたものの、病院に関しては資金、技術の面では劣っていると感じた。しかしマレーシアは開発途上国の中では裕福な方の国であるので、さらに貧しい国であればもっと医療環境は悪いのだろうと思った。他の国についても知りたいと思ったし、海外の医療により関心を持つきっかけになったと思う。

二つ目はマレーシアの文化について、特に多文化社会という特徴について、いろいろなことを体感することができたことである。現地の学生と話をしていると、さまざまな民族、宗教の人がいて、それぞれの生活、考え方が違うことを当たり前に受け入れていることが感じられた。街中でもいろいろな文化が入り混じっていて、複数の言語が使われていた。それぞれの文化に伝統的な食べ物があり、今回の滞在ではマレー料理、中華料理、インド料理すべてを食べてみるすることができた。短期間の滞在であったため、多文化社会の欠点を感じることはあまりできなかったが、異文化に触れるのはとても新鮮だった。

三つ目は、現地の学生との交流を通じて、刺激を受けたことである。マレーシアの生徒は学習意欲がとても高く、医学についての話をするとき、目が輝いていたのが大変印象的だった。それ以外のことに對しても積極的で、また日常的に使用しているため英語が上手かった。そのような学生たちと話すのは本当に刺激的で、英語の語彙をもっと増やそうと思ったし、日本に帰ってからも積極的にいろんなことを学ぼうと強く思った。

今回の留学で感じたこと、学んだことを忘れずに、今後も勉強やそれ以外の活動に積極的に取り組んでいこうと思う。また、今後もしこのような短期留学の機会があれば参加して自分の視野を広げていきたいと思った。

最後になりましたが、このような留学の機会を与えてくださり、支援していただいた、岸本忠三先生、岸本国際交流奨学金関係者の方々、マレーシアの国際医療大学でお世話になった先生方、学生、その他お世話になりました方々に、心からお礼を申し上げます。

海外活動についての報告

2018 年 9 月 13 日

氏名 M. H

● 活動中のスケジュール

(期間：2018 年 8 月 20 日～8 月 27 日)

- 19 日 日本出国、到着
- 20 日 文化施設見学
- 21 日 IMU 見学、講義
- 22 日 文化施設、博物館見学
- 23 日 Seremban Hospital (IMU 附属病院) 見学
- 24 日 医学体験実習、観光
- 25 日 文化施設見学、観光
- 26 日 美術品作成体験、文化施設見学
- 27 日 マレーシア出国
- 28 日 帰国

● 目的

AMSEP という留学プログラムを通じ、マレーシアの International Medical University(IMU, 国際医療大学)にて活動を行う。現地の医学生に案内してもらいながら、大学や病院を見学し、マレーシアの医療の現状について理解を深める。

また、医療施設に限らず、様々な施設を訪問し、マレーシアの文化に触れる。海外の医学生とのコミュニケーションを通じ、交友関係を深める。

● 活動内容

・ 20 日

プトラジャヤにて、モスクの見学により、主に宗教に関する理解を深めた。そこでは、当施設の案内員に、イスラム教の祈りを医学的観点から捉えた研究についての紹介も受けた。偶然ではあったが、結果として、宗教と医学の関連についても知見を得られた。

・ 21 日

IMU にて、学内の見学、講義の受講を行った。

見学を通じて1つ感じたことは、IMUでは、座学のみならず、包括的に医学を学ぶための環境が整っているということだった。例えば図書館の1区画では、医学書と各臓器の実物標本とが、部位ごとに並べられていた。また、患者に行う基礎的な検査のシミュレーションを行うことができる機器が豊富に配置されている部屋もあった。

講義は、3つ受講した。まずは、心筋梗塞の臨床的側面についてのもので、非常に高度な内容であった。ここでは、当大学にて通常のカリキュラムで行われている、実際の講義に参加する形となった。

そして、カイロプラクティックの講義では、歴史や効能など、カイロプラクティックの基礎的な知識の紹介を受け、その後、簡単な実技も行った。カイロプラクティックは診断、治療共に、高度な知識と熟練した技術が求められることを理解した。また、この分野に関して、日本においては医師よりも整体師が担うというイメージを抱いていたため、医学部で本格的に学ぶことへの驚きもあった。

最後は、伝統中国医学の講義であった。漢方薬、鍼治療などの基礎的な知識の紹介を受けた。日本では西洋医学が中心で、特に病院では東洋医学が重視されることは少ない。それに比べマレーシアでは、華僑が人口の一定割合を占め、経済的にも大きな影響力を持つ、という文化的背景もあり、伝統中国医学が人々に広く受け入れられている印象だった。講義を担当して下さった Zhou Wen Xin 教授が率いるチームは、東洋医学の先進的な研究、臨床で世界をもリードする。

・ 22 日

ヒンドゥー教の聖地で、有名な観光スポットであるバトゥ洞窟を訪問した。また、ピューター博物館にて、マレーシアの名産であるスズの展示物を観覧した。夜は、ナイトマーケットを巡り、現地の食文化を肌で感じる事ができた。

・ 23 日

IMU の附属病院の見学がメインであった。

Erwin Khoo Jia Yuan 医師に案内して頂きながら、小児科の病棟を回った。IMU の学生でも入室を許されない NICU の見学を含め、貴重な体験をさせて頂いた。また、彼は私たち日本人学生にも、親身に接して下さいました。当病棟についての説明のみならず、医学部や社会保険制度などの 2 国間での違いについてのお話もいただき、幅広く学ぶことができた。

その後、Kandasami Palayan 教授の教室で、外科手術の縫合の技法を教わった。実際に手を動かす体験は新鮮であった。

その他、臨床実習の期間にある現地の学生に引率され、採血や気管挿管などの手法についての体験、及び入院病棟の見学を行なった。病棟について印象的だったのは、日本の病院と比べ、衛生面など、患者を取り巻く環境がやや劣っていたことだ。当病院はマ

レーシア全国でも最大規模の病院であり、マレーシア全国から様々な生活水準の患者が通う。途上国であるマレーシアの、決して高いとは言えない経済水準を反映しているように感じられた。

・ 24 日

まず、ECG、採血、血圧測定などの模擬的な実技を行なった。現地の学生は 2 回生、3 回生でもこれらの技法を一通り習得しており、彼らから細かい説明を受けた。

その後、**Museum Session** として、症例をもとに、身体における動脈の位置を特定する体験型実習を行なった。1 つ残念だったことは、解剖学を学んでいなかったことだった。もし習得していれば、より実感をもって体験できたであろうと感じられた。

午後は、ペナンへ向けて移動した。**FRIM(Forest Research Institute Malaysia)**にて、ガイドに導かれながら熱帯雨林を散策し、自然を肌で感じた。

・ 25 日

ペナンの観光地を複数訪れた。**Penang Hill**、**Kek Lok Si**(寺院)、**Chew Jetty** という水上集落、である。とくに **Chew Jetty** は街全体が世界遺産に指定されており、印象的だった。

・ 26 日

Islamic Art Museum にて、イスラム教に関する多くの展示物を見た。医学書など、医学に関する歴史的展示物に特化しているフロアもあり、興味深かった。

また午後には、**Batik and Teh Tarik Workshop** として、美術品の彩色などの体験をした。

・ 27 日

プログラム最終日、食事などで交流を深め、クアラルンプール国際空港へと向かった。

● 成果および抱負等

大学のキャンパスでは、21 日の講義や授業をはじめ、IMU の教育に一部参加させてもらう形式となった。臨床に重きを置いた、普段とは一味違った角度から医学を学ぶことができた。そして、医学に関してより多くのことを、国際的な場においても理解するため、今後、意欲的に医学英語を学習しようと考えた。

また、病院見学では、現地の医療現場を見て回ることで、マレーシアの医療の現状を肌で

感じる事ができた。また、比較を通じて日本の医療事情をより深く理解するきっかけにもなった。

全体を通しては、マレーシアの多様な文化に触れたことが新鮮であった。これは、受け入れ側の学生が用意してくれた計画のおかげでもあり、おもてなしに感謝するばかりである。

自分自身としては、今後も、学生の中にこのような国際交流に積極的に参加することで、国際交流ならではの心踊る体験や友情の構築を経験したいと思った。そして、今回の留学の全てが、自らの人間的成長に繋がり、将来にも活かされることを期待する。

最後になりますが、今回の海外活動にあたって奨学金を寄付してくださった岸本忠三名誉教授に、心より感謝申し上げます。

平成 30 年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 2 年

氏名 M. N

スケジュール

- 8 月 19 日 関西国際空港発、クアラルンプール国際空港着
- 8 月 20 日 文化研修（サンウェイピラミッド、プタラジャヤ）
- 8 月 21 日 IMU 見学、講義受講、文化研修（クアラルンプール近郊散策、Mahajid Jamek）
- 8 月 22 日 文化研修（バトゥ洞窟、ピューター博物館）
- 8 月 23 日 Seremban Hospital 見学、Surgical Workshop
- 8 月 24 日 メディカルセッション、文化研修（トレッキングペナンの寺院見学）
- 8 月 25 日 文化研修（ペナンの自然、寺院見学）
- 8 月 26 日 文化研修（イスラム美術館、マレーシア伝統染織ワークショップ）
- 8 月 27 日 クアラルンプール国際空港発
- 8 月 28 日 関西国際空港着

目的

- ・ マレーシアにて、現地の医学生と交流し、医療現場を見学することで、マレーシアの医療事情について知る
- ・ 海外の医学生と交流することで、国際感覚を磨くとともに世界の医療事情についての理解を深める
- ・ 日本、マレーシア双方の文化を知る
- ・ 英語を通じたコミュニケーション能力を磨く

プログラムの概要

このプログラムは AMSA(Asia Medical Students' Association)という国際的な医学生団体の主催する AMSEP(Asian Medical Students' Exchange Program)という、アジアの医学部間での交換留学です。AMSEP のプログラム内容は、臨床実習か pre-clinical の実習かの別を問わず、5 日から 10 日の期間の留学および相手国からの医学生の受け入れの二つとなっています。

今回、私達は 2018 年 8 月 19 日から 27 日までマレーシアの IMU (International Medical University 国際医療大学) に留学しました。

なお、2019 年 1 月 6 日から 13 にちまで、私達が IMU の大学生を受け入れます。

8月19日

朝、一人も遅れることなく無事搭乗。英語に慣れようかと英語のアニメ「スポンジボブ」を見るもいつの間にか **fell asleep**。乱気流が発生するせいか、機体が大きく揺れることもあり、少し不安になったりもしたが、無事クアラルンプール国際空港に到着し、空港まで迎えに来てくれた現地の **AMSEP** メンバーと合流。

私は、マレーシアはイスラム国家ということもあり、女性はあまり肌を露出させてはいけない、だとか、インド系の方もいるから左手は使ってはいけない、など何かと厳しい文化規律があるのかと少し身構えていた。一緒に行ったメンバーは水など衛生面での不安をこぼしていて、正直心配なことはあった。ただ、空港について現地の人々を見て、また **AMSEP** メンバーと交流するなかで、そんな心配は杞憂だったとわかった。南国特有なのか、開放的で、明るく、気さくな雰囲気がとても素敵だった。これが、私のマレーシアに対する第一印象だ。ホテルに荷物を預けて両替を済ませ、夕食へ。ここで私は **Nasi Lemak**（マレー語で **Nasi** は米 **Lemak** は脂肪の意味）という料理を選んだ。マレーシアでは国民的料理だそう。飲み物はオーナーのオリジナルという虹色の飲み物。何が入っているのかわからなかったし、現地メンバーもみなわからないと言っていたが、とにかくおいしかった。この店だけなのかなと思ったが、マレーシアでは飲み物も多種多様なようだ。自分が選んだもの以外に、現地メンバーがみな“**Try!**”といって各々が食べていた料理を分けてくれた。マレーシアでは、料理をシェアし、一緒に楽しむことはとても重要なコミュニケーションの方法なのだ、と言っていた。

こののち、屋台で人生で初めてドリアンを食べる機会に恵まれた。

8月20日

マレーシアの政府関係各局があるプトラジャヤに行った。大統領官邸がモスクのようなイスラム建築で、イスラム国家というのを実感した。

となりにあったピンクモスクを見学。ガイドに方が日本にも医学にも詳しい方で、イスラムのお祈りが健康に及ぼす影響についての研究の話を熱心にしてくださった。素朴な疑問で、モスクは青や緑のイメージがあったが、なぜここのはピンク色なのか、と聞いてみたら、「だってピンクって珍しいでしょ。世界に3つしかないのよ。」という意外な反応が。とても面白い理由だなと思った。

8月21日

IMUで1年生の学生に混ぜてもらい、**Esha Das Gupta** 教授の「**Myocardial Infraction—clinical aspects**（心筋梗塞 医療的側面から）」という講義に参加した。英語がなまりもあって聞き取りにくいのはもちろんあったのだが、それに加え、自身の知識不足も思い知らされ

た。のちに現地の **AMSEP** メンバーから、先生に指名されても答えられず黙ってしまう生徒が多くみられると聞いた。インターナショナルスクールということもあり、西洋式の文化が根付いているのかと思いきや、意外なところが日本人と似ていた。その後、整体の授業、東洋医学の授業を受けた。整体の授業ではお互いに施術をやってみることもでき、効果がとても実感できた。中華系移民が多い国だということは知っていたので、東洋医学が取り入れられているだろうとは思っていたが、外来があるのには驚いた。こちらも見学させていただいた。

授業ののち、電車に乗ってクアラルンプール近郊の歴史的建造物を見て回った。電車が日本のものと変わらないほど清潔で快適だったが、マレーシアでは電車は時間に正確に運航しないうえ、限られた地域にしかいけないため、交通手段としてあまり有用ではないようだ。個人的にリクエストしていた **Mahajid Jamek** というモスクにも連れて行ってもらえた。マレーシアの独立記念碑を見て、マレーシアの独立記念日の話など、歴史的な話もきかせてもらえた。この時、シティマーケットにも立ち寄り、ココナッツ、マンゴスチンなどを食べることができた。

夜は **KLCC(Kuala Lumpur City Center)** で夕食をとり、観光地として有名なツインタワーを見た。クアラルンプールは、日本に比べ、凝った美しい建物が多い。それぞれがライトアップされ、夜も本当に美しい都市だった。

8月22日

Batu 洞窟という石灰岩質のところにできた洞窟の中にあるヒンドゥー寺院に行った。まず巨大な黄金の仏像に圧倒された。そして、中にある寺院がどれも本当に色とりどりで驚いた。理由を聞くと、色にはそれぞれ意味があるが、黒だけは死などを意味し、不吉なので使わないようだ。また、新しいカラフルな寺院が今もなお作られている最中だったことに、正直違和感を覚えた。比較的小となしい色合いの古くからある寺院をできるだけそのままの形で残そうとする日本とのギャップを感じたのだ。文化、価値観の差だと思う。日本の寺院は、時がたっても変わらぬ姿で人々を出迎えるが、**Batu** 洞窟は、行くたびに異なる進化した形を見せてくれるのだろう。どちらもいいなと思う。大量に野生の猿が生息しており、観光客が嬉々として餌をやっていた。なんとなく奈良公園の鹿をほうふつとさせる。

その後、午後はピューター博物館を見学した。ピューターというのは、マレーシアの特産となっている、錫を使った合金の一種である。これによって作られている作品は本当に皆繊細できれいだった。

夕食は、ナイトマーケットで食べ歩きだった。毎週水曜日のみ開かれているらしいが、その日がたまたま祝日だったこともあり、ものすごい人ごみだった。現地の食べ物がわからない私達に、現地の子たちがオススメを選んできて片っ端から食べさせてくれた。

8月23日

IMU の実習先である Seremban Hospital に見学に行かせてもらった。救急車が十字マークではなく三日月のマークをしているのを見て、高校の時世界史で学んだ十字軍の影響を初めて自分の目で見た。なぜか病院が黄色で、ダメ元で日々ここに通っているという学生に理由を聞いてみたところ、黄色は、王さまに対しての忠誠の色なのだそうだ。（マレーシアの学生はささいな質問でもきいたらほとんど全て答えてくれた）小児科の Erwin Khoo Jiayuan 先生が小児科病棟を案内してくれ、マレーシアの公立病院と市立病院の医療費負担システムの違いなども話してくれた。昼食後、IMU の上級生が診療科目ごとに入院病棟を案内してくれた。その後、午後からは IMU の校舎を見学した。臨床技術の練習をするために様々な症状を組み込むことのできる AI 搭載の人形がいたことには驚いた。その後、Surgical Workshop で外科結びの練習をした。

夜は Cultural Night といって、マレーシアの文化をマレー文化、中国文化、インド文化にわけて紹介してもらった。もっとも印象的だったのはマレー文化の紹介で聞かせてもらった歌だった。太鼓やマラカスなどの楽器の伴奏の元、一人のリードヴォーカルを中心に掛け声や歌、手拍子、身振りをいれるのだが、創造以上に力強く、たくましかった。

8月24日

IMU にて、実際の医療行為のシミュレーション練習に参加した。マレーシアの学生は1年生の時から臨床技術の練習をし、試験もあると言っていた。

午後からはバスでペナンへ移動し、マレーシア森林研究所という場所に見学し、自然を案内してもらった。花卉やガクがなく、めしべだけに見える花や、ゾウの鼻の異名を持つ熱帯樹、異様に大きいアリ、など、日本とは異なる生物種が多く存在していた。

その後仏教寺院を見学したが、こちらにもまた色とりどり。豪華絢爛。といった雰囲気では日本の仏教寺院とは大きく異なる印象だった。

夕食は市中の屋台でとり、映画「アバター」の舞台となった寺院を見学した。こちらはもはや、寺院と言っていいかわからないくらい、ライトアップが鮮やかで幻想的だった。

8月25日

Penang Hill に登った。また、姓周橋という、橋の一角がみな周さん、という世界遺産の集落に行った。

8月26日

クアラルンプールに帰ってきて、イスラム博物館に行った。イスラムで研究されてきた科学、医学などの学問、モスクなどの建築様式、そしてもちいられていた調度品などが展示されていた。この博物館は、自由に撮影可能だった。

午後は、マレーシアの伝統的な染織体験、またお茶づくりのワークショップに参加した。

8月27日

別れを惜しみながら帰路につく。

成果

<文化面>

現地の学生が案内してくれるということもあり、友達同士で旅行に行くだけでは訪れることができないような地元のお店やナイトマーケットにまで行くことができた。観光地としてではなく、本当の意味でマレーシアの暮らしを少しは知ることができたと思う。また、他民族国家ということもあり、言語、文化が入り混じっていて大変興味深かった。それと同時に、いまなお続く人種差別政策ともいえるブミプトラ政策の具体的な内容や、それについて現地の人々がどう考えているのかについても触れることができた。大学入試や子供に対する優遇措置なども異なることを私は初めて知った。

<学習面>

マレーシアでは大学に行く前に一般教養のような形で **College** に1年行ったのち、大学の医学部に5年間在籍する。計6年という学習期間は同じだった。カリキュラムが異なることもあり、また私の学年がまだ二回生ということもあり、医学的知識も不十分なため、医学知識、技術として学ぶことも多くあった。

ただ、私の中で、もっとも大きかったのは、現地の学生の学問に対する姿勢だった。たとえば、イスラム美術館に行ったときにも、説明文を読まなくてもそれと同じくらい詳しい説明ができる学生がいた。理由を尋ねてみると、高校で習った、という。私は世界史選択で、センター試験は満点だったが、ほとんどの内容を忘れてしまっている。モルディブ出身の学生は、日本のアニメが好きで、見ながら勉強したの、と言いながら、驚くほど流暢に日本語を話す。私とバディーを組んでくれていた学生は、中国系で、インターナショナルスクール出身ということもあり、英語と中国語は完璧、趣味で日本語を勉強していると言ううえ、30歳までに習得したい言語のリスト、といって10個もの言語がのったリストを見せてくれた。毎日宿題や予習などの勉強で忙しく、アルバイトはおろか、クラブ活動もしていない学生が多くいた。私がアルバイトで塾講師をしているというとみんなすごい、と言ってほめてくれたが、ある学生に言われた「大学生の間、遊ぶのもいい、勉強するのもいい、半々なのが多分いちばんいい。でも、アルバイトはそんなにいいとは思わないな。だって君には、教師としての生徒に対する責任よりも重い、医師としての未来の患者への責任がある。」という言葉が頭から離れない。

つたない私の英語にも”Your English is really nice!”といって一生懸命理解してくれて、事あるごとにマレーシアはまだ発展途上国だから、日本のような先進国から学ぶことが多くあると言っていた。

私は、彼ら AMSEP メンバーが日に日に好きになっていった。今でも大好きだ。最初は、周りのメンバーに比べうまくコミュニケーションがとれず、元来社交的な性格でもなかったため、できるだけ現地メンバーと一対一になりたくないとさえ思うこともあった。そんな自分に嫌気がさして、悲しくなったこともあったが（約一晩）現地メンバーと一緒に時間を過ごすにつれ、彼らのことを少しでも理解したい、つたない英語でもいい、思っていることを伝えたいと思えるようになった。これが本来のコミュニケーションだと思う。

抱負

まず、少しでも理解しあえるように英語を勉強したいと思います。大学入試が英語のゴール、のような思いこみを勝手に持っていましたが、本当の意味でコミュニケーションをとるためには、語彙をはじめとして、まだまだ勉強しなければならないことが多くあると痛感しました。

大学生活においても、ただ漫然と日々を過ごすのではなく、医師になるための準備期間として、意識して学問と向き合っていきたいと思っています。

そして、マレーシアの AMSEP メンバーに少しでも恩返しができるよう、一月の受け入れを充実したものにしていければと思います。

最後になりましたが、このプログラムに参加する機会が与えられたこと、また留学を支援してくださった岸本奨学金制度に心より感謝しています。ありがとうございました。

2018 年度岸本国際交流奨学金による活動報告書

医学部医学科 2 年

学生番号 *****

氏名 S. T

1. スケジュール

- 8 月 19 日 関西国際空港発、クアラルンプール国際空港着
- 8 月 20 日 文化研修（サンウェイピラミッド、プトラジャヤ）
- 8 月 21 日 IMU（International Medical University）見学、講義受講
- 8 月 22 日 文化研修（バトゥ洞窟、ピューター博物館）
- 8 月 23 日 Sereban Hospital 見学、Surgical Session
- 8 月 24 日 Museum Session、文化研修（トレッキング、ペナンの寺見学）
- 8 月 25 日 文化研修（ペナンの海岸散策）
- 8 月 26 日 文化研修（イスラム美術館、イスラム美術ワークショップ）
- 8 月 27 日 クアラルンプール国際空港発、関西国際空港着

2. 目的

文化研修や病院見学など医療系のプログラムを通してマレーシアの文化と医療について知り、日本との違いを認識する。また、現地の医学生との交流を深め、日本の文化や医療現状について知ってもらうこと。

3. 活動内容、成果

プログラムの概要

このプログラムは AMSA（Asian Medical Student's Association）という国際的な医学生団体の主催する AMSEP（Asian Medical Student's Program）というアジアの医学部間での交換留学である。AMSEP のプログラム内容は 1 週間前後の留学と相手国からの医学生の受け入れの 2 つとなっている。

今回私たちは 8 月 19 日から 27 日までの期間でマレーシアの IMU に留学した。そこで、文化研修や病院見学、講義受講などを行った。なお、2019 年 1 月 6 日から 13 日の期間で IMU の医学生を受け入れる。

プログラムの詳細

8 月 19 日

マレーシア、クアラルンプールに到着。

8月20日

この日は主に観光を行い、マレーシアの文化について学んだ。サンウェイピラミッドとプトラジャヤを見学した。プトラジャヤはマレーシアでの多数派のイスラム教徒のモスクであり、イスラム教独特の様式の美しさに圧倒された。

8月21日

まずIMUでの学びの環境、設備を見学した。最も驚いたのは模型の多さで血管などの器官まで再現したリアルな模型が多くあり、生徒たちが自由に触れられるということであった。マレーシアは日本に比べ、実践を重視していると感じた。日本でももう少しこのような環境を重視し、設置しても良いのではないかと感じた。

次に講義受講では Jack 教授の心筋梗塞についての講義、Michael Thomas Haneline 教授の Chiropractice の講義、Zhou Wen Xin 教授の中国医学の講義を受講した。特に印象に残ったのは中国医学で、日本では講義が行われていないことや学問というよりは経験に基づく点で新鮮であった。

8月22日

この日はバトゥ洞窟とピューター博物館の見学を行った。バトゥ洞窟はヒンドゥー教徒の寺院で自然の洞窟を利用したその壮大さに驚いた。ピューター博物館では日本ではあまり利用されないピューターという金属について学んだ。

8月23日

まず、IMU が主に実習などで利用する Sereban Hospital の見学を行った。小児科の Erwin Khoo Jia Yuan 医師に小児科を案内してもらい、その後他の科も見学した。病院の施設は思っていたよりも進んでいたが、感染を防ぐための隔離室などがあまりなく、やはりその点では日本の方が進んでいると感じた。また、宗教的理由から患者を男女で分けているのを少し不思議に感じた。

次に Surgical Session で Dato 教授、Kadasami Palaya 医師から外科における縫合の基本を学んだ。実践的なことをほとんど学んでいない私たちにとって非常に新鮮であった。この技術は非常に重要であるので、練習していきたい。

8月24日

午前中は Htar Aung 医師による Museum Session を受講した。ここでは主に触診について学んだ。実際の人体を使って説明を受けたのが印象に残った。

午後はペナンに向けて出発し、その途中でマレーシアのジャングルをトレッキングし、マレーシアの自然を体感した。また、ペナンの寺院を見学した。

8月25日

クアラルンプールに向けて出発し、その途中で海岸を散策した。ここには水上マーケットがあり、日本との違いを感じた。

8月26日

まず、イスラム美術館でイスラム教特にイスラム医学について学んだ。特に独特なイスラム様式

の建築についての展示が印象に残った。

次に伝統的なイスラム美術のワークショップで自分の作品を完成させた。実際に手を動かしたこともあり、非常に思い出に残るものとなった。

8月27日

音楽を通して交流を深め、日本に向けて出発した。

4.抱負

このプログラムで奨学金を出してくださった岸本先生や教務の方々、そしてなにより受け入れてくれたマレーシアの学生の方々や先生に本当に感謝したい。まずは1月の受け入れに全力を尽くし、それ以降のプログラムにも積極的に参加していき、より広い視野を持つ人間に成長していきたいと感じた。

平成30年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 2年

氏名 N. T

マレーシア、IMU における短期研修の報告

スケジュール

2018年 8月 19日 大阪関西国際空港発 マレーシア クアラルンプール国際空港着

8月 20日 Putrajaya

8月 21日 Campus tour

Lecture

(Myocardial infarction/ Chinese medicine/Chiropractic)

KLCC 散策

8月 22日 Batu cave 散策

Royal Selangor Pewter

Night Market

8月 23日 Seremban Clinical Hospital(IMU)

Surgical Workshop

Cultural Night

8月 24日 Clinical Skills Simulation Centre

Medical Museum Session

Forest Research Institute Malaysia

Averter secret Garden

8月 25日 Penang Hill

Kek Lok Si

Chew Jetty

8月 26日 Islamic Art Museum

Batik and Teh Tarik Workshop

Closing Ceremony

8月 27日 マレーシアクアラルンプール国際空港発

8月 28日 大阪関西国際空港着

1. 活動の目的

- ・マレーシアと日本のものの考え方の違いを学び、多面的に物を見る力をつける。

- ・あらかじめ収集した知識を基に、マレーシアの学生と議論をし、さらなる高次の知見を得て、帰国した際の自分の医学の理解に役立てる。

- ・マレーシアの医学生や医師と接することで友好を深め、そして国際感覚を養う。

- ・マレーシアの医学生に、日本の医療や文化を発信する。

2. 活動内容

この活動は、AMSA(Asian Medical Students' Association)という国際的な医学生の団体が主催する AMSEP (Asian Medical Students' Program)という、アジアにおける医学部間での交換留学です。

今回、私たちは 8 月 20 日から 27 日までの期間でマレーシアの International Medical University(IMU, 国際医療大学)に留学します。そこでは、大学や病院での講義および見学、現地の医学生とのワークショップやディスカッション、そしてマレーシアの文化施設の見学を行う予定です。そして現地の医療制度を学んだり、現地の人々の考え方に触れたりする予定です。なお、2019 年 1 月 6 日から 13 日までの期間で私たちが International Medical University からの医学生を受け入れます。

3. 今回の活動内容

3-1 見学施設一覧

以下の施設を見学しました。

- ・ IMU Seramban 病院

病棟(小児科、産婦人科、整形外科)、救急部、病理部、霊安室、外来、集中治療室、耳鼻咽喉科

図書館見学

Surgery Session(手術時の傷の縫合についての講義を聴講、練習用器具を使い、体験。)

手術シミュレータを体験

シミュレータを使って、気管挿管及び採血を体験

- ・ IMU Main Campus 見学

大学図書館見学

Myocardial infarction についての講義

Chiropractic についての講義と体験

Chinese medicine についての講義と体験

採血の体験(シミュレータ)

心電図の体験(シミュレータ)

血圧測定(手動)の体験(シミュレータ)

子宮頸がん検査の体験(シミュレータ)

Museum Session(症例を交えた解剖学の講義を聴講)

- ・ Islamic Art Museum の見学
- ・ KL 市内とその他マレーシア国内の見学

KLCC、Putrajaya、Batu cave、Royal Selangor Pewter、Night Market、Forest Research Institute Malaysia、Averter secret Garden、Penang Hill、Kek Lok Si、Chew Jetty、Batik and Teh Tarik Workshop

3-2 見学した施設での体験内容の詳細

3-2-1 IMU Seramban 病院



IMU Seramban 病院は、先方の大学である International Medical University(IMU)のキャンパス内に存在する IMU 所属の大学病院で、IMU の学生は、5 年間の学生生活の内、3 年生 4 年生においてこのキャンパスにて臨床医学を学んでいます。このキャンパスは、5 つある IMU のキャンパスの中で、敷地が最も大きいようです。主に Dr. Erwin Khoo Jia Yuan 先生に案内していただきました。

病院内全体の様子

病院内の様子は、日本の病院と大差ありませんでしたが、日本の病院が、全ての階に等しく冷房が効いているのに比べ、ここの病院は上階の冷房の効きはあまり良くなかったです。院内を回る中で、日本の医療技術を輸入し応用していると伺った施設もありました。

小児科

院内の中庭や、ベランダ、また室内にも遊具が設置されていました。また、壁紙にアニメのキャラクターや可愛らしい動物たちが描かれており、子供たちが病院を嫌ってしまわないような工夫がなされているなど感じました。日本と同様に院内学校もありました。子供

たちに、必要な教育を提供しているだけでなく、公のテストもそこで受けられるようになっているようです。

整形外科

脛骨のピロン骨折の患者さんが、足に大きな金属の固定器具をつけてベッドに寝ているのをよく見ました。初めて見るものだったので、その見た目に驚かされました。なお、病室ごとの仕切りはあまりなく布がある程度でした。患者さんの病状の程度に応じて、患者さんがつかうベッドの位置が決まるようです。ナースステーションの近くであればあるほど、病状は重いようです。それは、整形外科だけでなく他の科においても同じでした。

外来

大学病院では、やはり日本のように長時間患者さんを待たせてしまうという問題を抱えているようです。症状が軽い場合は、市中病院に、ひどい場合は、大学病院に、というシステムはあるようでした。

マレーシアの医師について

マレーシアでは、医師になった後大学院に戻り研究医になるという道を取る人は少ないようです。日本のような医師国家試験はなく、医学部を卒業すると、医師になることが出来るようです。医学部は、日本より1年少ない5年間のカリキュラムが構成されています。IMUでは、卒業率は半分程度と少し厳しいようです。

マレーシアの病院内での患者さんとのコミュニケーションにおける言語の問題について

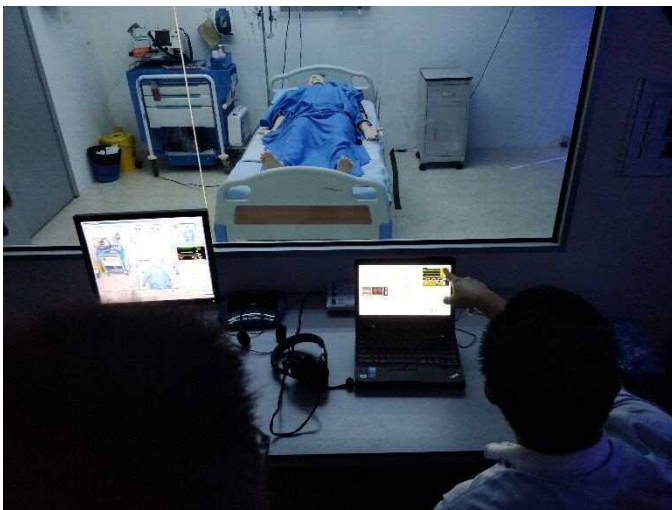
マレーシアでは、主要な民族として3つの民族があげられます。マレー系、中国系、インド系の3民族です。英語を話せない人は一定数存在しますがマレー語は大抵の人は話せるようです。なので、大抵はマレー語で対応されているようです。中国語やインド系の言葉しか話せない患者さんの場合は、中国系やインド系であればそれぞれの言葉を話せる看護師や医師は存在するので、その人達で対応するようです。それ以外の言語の話者で、英語を話せない人の場合は、通訳を呼び対応するようです。

IMU Seramban Clinical Campus 内図書館



基礎医学の教科書よりも、臨床医学の本が数多く並んでいました。閲覧スペースと、本棚の距離は近く、すぐに参照できる配置になっています。IMU Main Campus 内図書館と比べると規模は小さかったです。

手術シミュレータ



手前のコンピュータを使ってシミュレータの状態を変化させ、学生達がそれぞれの状態に対して適切な処置が出来るように訓練しているようです。マレーシアの外科手術でも、日本と同様に侵襲性の問題などから腹腔鏡手術が良く用いられているそうです。

次のページの写真は、気管挿管の様子です。このあと、チューブを入れ器具を取り付けてしっかりと空気が肺に送られるかを確認します。



Surgery Session

Prof Dato Dr. P. Kandasami Palaya 先生にご教授頂きました。手術の傷の縫合についての授業でした。はじめは、輪ゴムと縄を用いて結び方を学び、その次に、輪ゴムと実際の針と糸を使って、糸と針の扱い方を学び、最後に、動物の皮を使って、その傷を縫合しました。男結びになるように縫合するのが良いということを学びました。理由としては、ほどけにくいことや縫合した時の糸が組織に対して盛り上がりず平たんにすることで感染症を防ぐことができるからだと学びました。男結びは、最終的に結び目が記号の「 π 」に見えることが特徴です。縫合は、きつすぎても緩すぎてもよくなく、ちょうど傷口がくっつくぐらいが良いと学びました。一本の糸で、切らずに1つの切り傷を縫合するやりかたや、抜糸の方法も学びました。行動一つ一つに合理的理由があり、十分に理解しながら学習を進めることが出来ました。

3-2-2 IMU Main Campus

日本の大学のカリキュラムは、基礎医学、臨床医学、臨床実習の順で進んで行きますが、マレーシアの International Medical University(IMU)では、臓器ごとに、基礎医学臨床医学的知見を得ていく学習方法になっています。今回、IMU の学生と共に学部1年生の授業を受けたが、講義内容としては心筋梗塞で臨床医学にあたる内容でした。

IMU Main Campus 大学図書館

大阪大学の大学図書館と似通った部分は多かったです。(コンピュータによる蔵書検索や、グローバルコモンズなど。)ただし、異なる部分も多く見受けられました。図書館の前にカフェのようなものがあったり、図書館に写真のような臓器や骨の模型室や、標本室が併設されていたりしていました。学生が好きな時に各臓器の模型を手にとって観察できる設備は非常に便利で学習効果は高いだろうと感じました。



Myocardial infarction についての講義

Ms Jack 先生による大きな講義室での講義でした。多くの学生達が参加していました。パソコンを使ってノートをとる学生が多くみられました。臨床医学的内容でした。急性冠症候群から起こる症状、その診断方法、治療法へと講義は進んでいました。ただ、僕が、難しい医学単語や、講義に出てくる基本的症状等を調べるのに必死で、講義を聞きながら、考えるということは出来なかったのが非常に悔しく思いました。

Chiropractic についての講義

Prof Michael Thomas Haneline 先生による講義でした。IMU は、Chiropractic の学位プログラムが存在する東南アジア唯一の大学だそうです。Chiropractic は筋骨格系症状の治療のために用いられる治療法で、現在マレーシアにおいてその需要は増しているそうです。二人一組で脊椎の位置を手によって確認したり、脊椎周囲の骨格がどのように動くかを理解したり、相手の背中の骨格の左右の違いを調べたりしました。

Chinese Medicine についての講義

Prof Zhou Wen Xin 先生による講義でした。中国医学は、非常に古い歴史があり、近年でも代替・補完医療として注目を集め続けているそうです。中国医学から着想を得たマラリア治療薬「アルテミシニン」はノーベル賞を受賞したということも学びました。鍼灸や、カップリング療法の概要を学びました。鍼灸については体験もさせていただきました。IMU には、中国医学の診療所も大学内の病院の施設の一部として存在していました。そのことから、マレーシアで中国医学がどれだけ重要な位置を占めているかを実感することが出来ました。

Museum Session(症例を交えた解剖学の講義)

Dr Htar Htar Aung 先生による講義でした。ある患者さんの症状を基にその症状に関連する動脈の働きや位置を学ぶ授業でした。模型、標本、自分の体全てを使って学ぶ授業は非常に面白かったです。また IMU 全体の学習における臨床医学の学習の占める割合の多さに驚きました。

3-2-3 Islamic Art Museum

イスラム文化における医学や、建築技術の発展について学びました。日本の伝統的な木造建築と異なる建築様式と、鮮やかな装飾に心を奪われました。また、イスラム文化における医学がとても高い水準まで発展していたことを、展示から知ることが出来ました。

3-2-4 Putrajaya

マレーシアの首都はクアラルンプールですが、現在政治機能は徐々にこの **Putrajaya** に移動しています。**Putrajaya** は、クアラルンプールの人口過密を理由に政治機能をクアラルンプール以外の都市に移転させることを目的としてつくったマレーシアの計画都市です。首相官邸を守る警備員が、イスラーム独特の恰好であったことや、首相官邸の前にモスクがあったことで、マレーシアにおけるイスラームの影響の大きさを実感することができました。実は、もともとマレーシアのトイレには、トイレットペーパーはなく、ノズルから水を出してそれで洗うかたちなのですが、クアラルンプールの中心街や、空港にはもうトイレットペーパーも設置されていました。ただ、**Putrajaya** のモスクの前のショッピングモールでは、トイレットペーパーが設置されていなかったのも、まだ整備途中の新しい都市なのだろうと推察できました。



モスクも訪問しました。観光地でありながら、祈祷の場所でもあるので、しっかりと入場できる時間や服装が定められていました。



3-2-5 Batu cave

Batu cave は、マレーシア随一のヒンドゥー教の聖地の洞窟です。ここも、観光地であると同時に聖地なので、奥にはヒンドゥー教徒しか入れないそうです。この洞窟には、独自の生態系があり、Batu cave にしかみられない生物もいるようです。



3-2-6 Royal Selangor Pewter

マレーシアの産業を発展させた錫の生産、加工に関する博物館でした。

3-2-7 Night Market

1 週間に一度だけ開かれる夜市で、屋台が全長 2km にわたって続きます。日本ではみない、多様な民族が住むマレーシアが育んだ様々な食べ物が並んでいました。とても多く人々が集まり、前に進むだけでも大変でした。



3-2-8 Forest Research Institute Malaysia

マレーシアの国立公園のひとつです。ここでは、熱帯気候の動植物が生態系を育んでおり、研究が盛んに行われています。よく見る日本の動植物よりも随分大きな動植物たちに非常に驚き、自然の力の大きさに感動しました。

3-2-9 Kek Lok Si temple

ペナンにあるマレーシア最大の仏教の寺院でした。同じ仏教でもマレーシアの寺院に、日本の仏教の寺院と少し異なる雰囲気を感じました。



4 成果

医学部の学習は日本の、基礎医学から臨床医学、臨床実習へと進む方法のみを知っていましたが、マレーシアでは臓器ごとに学習するという新たな視点を学びました。そして、マレーシアの授業は、診断や治療法に着目した授業が1年生から行われていたり、手技の授業が良く見られたりするなど、臨床医育成に非常に力を入れたものであると感じました。日本の学習とは異なるデメリットもあるでしょうが、「疾患の治療」という目標を常に実感しながらの授業は日本の授業とは違ったまた別の面白さを体感しました。日本でのこれからの学習でも、単に知識として入れるのではなく、これは現在の医療の何にかかわっているのかを考えながら学ぶことで、学年が進んだ時に多様な知識の応用が可能になるのではないかと考えました。

多様な民族が共存するマレーシアで、外国人観光客がこれから増加し国内の民族の多様化が進む日本の医療における異文化、異国語の問題の解決の糸口を見つけられるのではないかと先生方や学生達とお話させていただきました。マレーシアの学生の出身は様々で、彼らの母語もそれぞれ違うと学びました。それでも、お互いにコミュニケーションをとる為に、自分から英語をしっかりと学んで話したり、相手の母語について積極的に学ぼうとしたりしていました。大抵の学生が最低でも、マレー語、母語、英語の3か国語が話せるということに驚いたのですが、更に4か国、5か国語話せるという事実には、非常に感銘を受けました。また、IMUの受け入れ側の学生たちは日本語にも興味をもち、期間中を通して僕達にあれば日本語でなんて言うのかと聞く姿をよく見ました。先生方も、何とか、患者さんとコミュ

ニケーションをとる為に、その言語を話せる医療従事者や通訳を通して、患者さんの意思を聞くようです。異文化や異国語の問題は、まず、相手のことを積極的に知りたいと思う気持ちが重要で、そこから自分で積極的に言語を学ぶことが重要だと感じました。そして通訳などのシステムの充実化を進めていく必要があると思いました。

今回、学生さんや先生方とのコミュニケーション、授業全ては、英語で行われました。難しい医療英語や日常表現の知識不足などが原因で相手の言うことが聞き取れないことが数多くありました。日々、英語を学んでいくことの重要性を再認識しました。

5. 抱負

今回の経験は、阪大の教務の方々や先生方、IMU の学生さんや先生方がいなければ得ることが出来ないものばかりでした。常に問題意識を持って広い視野で事に当たることの出来る医師になれるよう、マレーシアで得た知見を基に、日本で日々研鑽を積みたいと思いました。

次は、今回受け入れてくれた IMU の学生さんたちを日本に受け入れることになっていますので、そこでしっかり日本の医療と文化を発信し、英語力と医学的知識をつけてマレーシアで出来なかったような知識の交流をしたいと考えています。

最後に、今回の経験を可能にいただいた、岸本国際交流奨学基金並びに岸本忠三先生、祖父江先生、その他大阪大学の先生方、IMU の先生方、学生に心からの感謝を申し上げます。

平成30年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 2年

学籍番号 *****

氏名: K. K

1. スケジュール

2018年8月19日 関西国際空港発、クアラルンプール国際空港着
2018年8月20日 文化研修(サンウェイピラミッド、プトラジャヤ)
2018年8月21日 IMU(International Medical University)見学、講義受講、文化研修(クアラルンプール散策)
2018年8月22日 文化研修(バトゥ洞窟、ピューター博物館)
2018年8月23日 Sreman Hospital 見学、surgical workshop
2018年8月24日 メディカルセッション、文化研修(トレッキング、アバターガーデン)
2018年8月25日 文化研修(ペナンヒル、Kek Lok Si(Chinese temple)、海岸散策)
2018年8月26日 文化研修(イスラム美術館、イスラム美術ワークショップ)
2018年8月27日 クアラルンプール国際空港発
2018年8月28日 関西国際空港着

2. メディカル研修

● 目的

マレーシアでの医療現場や医療教育について知り比較することで、日本のことについて客観的に評価できるようになること。

● 内容、成果

大学見学や病院見学をした。私学ということもあり大学の設備は素晴らしかった。とくに臨床の練習のための設備がとても整っていた。採血や気管挿管の練習のためのものが何台もあった。また、集中治療室を模した部屋で人形の患者がいて、別室のコントロールセンターで患者のバイタルや肺の音、瞳孔の開閉などを管理して治療の体験をするというハイテクな機械も置いてあった。これにはとても驚いた。医療技術の水準は日本とあまり変わらないように感じた。ただ入院病棟は一つの大きな部屋にベッドがたくさん置いてあり、それを仕切るのはカーテンだけだった。私はそこで入院はしたくないと思った。また、小児病棟にはときどき学校の先生が来て入院患者に勉強を教える部屋があったので、それはいいと思

った。私は病院の目的は病気の治療だけではなく社会復帰の支援も含まれていると考えているので、日本にもそういう病院がもっと増えるといいなと思った。

- 今後の抱負

ほかの国にも行って、もっと客観的評価ができるようになりたい。

3. 文化研修

- 目的

他国の文化を知ることにより自分の考え方の視野を広げること。

- 内容、成果

プトラジャヤではピンクモスクに行った。バトゥ洞窟はヒンドゥー教の聖地であり、ペナンでは中国のお寺にも行った。今回の留学では様々な宗教にゆかりのある地に行ったのでいろいろな文化について肌で感じる事ができた。マレーシアの人種の多様性がよく分かった。日本は島国で、しかも日本に住んでいる人のほとんどが日本人なのでいろいろな民族、宗教観の人が一つの国に住んでいるという状況は私にとってとても感慨深いものだった。

- 今後の抱負

今度は日本の文化を正しく理解し外国の人にしっかりと説明できるようになりたい。

渡航先国及び受け入り機関名

マレーシア所在、International Medical University(IMU)

海外活動の期間

平成 30 年 8 月 20 日～平成 30 年 8 月 27 日(8 日間)

氏名：K. H

- 活動の目的

今回のマレーシアへの訪問は AMSA(Asian Medical Student Association)という団体が繰り広げる AMSEP というプログラムの一環で、国内外の医療系学生との交流を深めることを目的にしました。それとともに、海外の医療施設やシステムを直接触れることで、日本の医療、あるいは医療そのものを深く考えてみる契機になることを期待しました。また、国内だけでは味わえない文化的な違いを理解することによって、将来、多くの人と触れ合うことの多い医師の多様性を認める意識の涵養にもつながると思いました。

特に、マレーシアはマレー人、華僑、インド人を中心とした多様な人種と言語、宗教、文化が共存している国です。「そうした社会では、医療システムが日本とはどう異なるのか」「多様性に伴ってくる諸問題はどのように解決しているのか」などの疑問に興味を持ちました。つまり、「国際化」と「医療」はどう結び付けられるのかといった問いに答えるための少しの手がかりを見つけることができるのではないかと思います。

- 活動の内容

9 日間何とでも変えることのない貴重な体験をしました。まずは、文化的な体験を述べようと思います。クアラルンプール国際空港に到着した時から、マレー語で記された看板を見て、マレーシアに来了という実感をしました。入国手続き後、迎えに来てくれた学生の方々は中華系の人々で国籍はマレーシア、シンガポールとなっておりました。さらに、初日、メンバー全員がそろって夕食を一緒にしたところ、相手のグループはインド人、バリー人、バングラデッシュ人、シンガポール人、マレーシア人といった多様な国籍で構成されていることを知って驚きました。

食文化も多様性に富んでいました。ナシゴレンといったマレーシアの代表的料理をはじめとし、中華料理、インド料理などをいただきました。多様性ほどに量にも富んでいて、しかも安いことから食べ過ぎてしまいました。これは、マレーシアをグルメの天国と名付ける理由でありながら、高い糖尿病の発病率の原因となるらしいです。

宗教はイスラム教を中心に、仏教、ヒンディー教など異なるものが共存しました。国の宗教はイスラム教であり、豚肉とアルコールは禁止であります。こういった小さな規定が社

会の様々な部分に影響を及ぼしています。例えば、豚肉の成分は全く入っていないハラルフードを探す人が周流であって、マクドナルドのハンバーガーの肉もほかの国のそれとは違ったり、ケンタッキーがほかのファーストフード店より人気高になったりするらしいです。同じように、医療を行う際の患者の接し方に影響を及ぼすかもしれません。多様な宗教のそれぞれを象徴する代表的なスポットへ行きました。イスラム教では、プトラ・モスクに行きました。短いパンツをはいて院内に入っては行けなくて、足の上をはおうことのできる上着をレンタルして入りました。圧倒されるほど美しい建物でありました。ちなみにイスラム教は日に五回、聖地メカに向けてお辞儀をするということで、ホテルの部屋にも天井にメカに向けてる矢印がついています。

ヒンディー教の代表的な寺院は、Batu cave というところで世界最大の仏像と事前が作った巨大な洞窟が有名です。

プログラム中にペナン島に行くことができました。クアラルンプールからバスで4時間かかる距離にあるこの島もまた美しい景色を有しています。ケックロックシーという仏教の寺院を見物しました。仏教特有の香煎の匂いに浸りました。

IMU の学生たちが企画してくれた Cultural Night では、マレー、中華、インドといった代表的な3文化に直接触れながら楽しむことができました。まずは、マレーシアの伝統的な民族音楽に接しました。そして、中国の伝統の折り紙を体験して自分の作品を作りました。最後に、インド伝統の文化を紹介された後、インド伝統のヘナを用いで互いの腕に絵を描くことをしました。きずなを深めた楽しいイベントでした。

多様な人が作り出している豊富な文化が混ざっていて、楽しさで満ちた9日でした。

医学的にも非常に有意義な活動をしました。まずは、IMU の見学をしました。Ms Jack 先生の「Myocardial infarction」という講義で授業の学生の様子を見ることができました。講義は英語の講義で教室内に空いてる席はほとんどなかったです。この講義では、心臓疾患についての知識を接することができました。その後、代替医療のコースも備えていることは不思議でした。Prof Michael Thomas Haneline の「Chiropractic」の講義を受けました。また、Prof Zhou Wen Xin の漢方医学の講義も受けることができました。現代医学の周りには、このような違う視点で病気にアプローチする分野もあることがわかり、すごく興味がわきました。

IMU の Museum Session では用意してある人体解剖の模様を用いて、自分の体を観察し、実際の病例を参考にして人体について考察する時間を持ちました。Dr Htar Aung が詳細に指導してくれたおかげで楽しい授業になりました。

病院見学も欠かせないです。小児科医の先生 Erwin Khoo Jia Yuan から病棟の見学をさせてもらい、棟内の様子や、マレーシアの医療システムについて語ってもらいました。

外科のセクションも体験する機会がありました。実際の患者ではなく、患者をモデルした機会を利用して、臨床の状況を練習することが印象的でした。また、鶏肉の皮の切り目を外

科用針で縫う体験もしました。今まで体験したことのない体験をしたので、非常にワクワクする経験でした。

- 成果

学校で勉強ばかりしていると、世界が動く様子に鈍感になってしまう恐れがあると思います。実際に、日本で医学を学びながらも日本の「医学は何か」「日本とは何か」という質問はあまり自問していませんでした。今回、マレーシアの病院を見回って改めて、「大阪大学病院はどうなっているのか」の好奇心が強くなりました。この体験を踏まえて、今後私自身勉強していくうえで役に立つのではないかと思います。また、医師になろうとしている海外の新しい友達との連絡を続けることによって、様々な考えを交換できるのではないかと思います。

- 今後の抱負

IMU の学生たちに非常に親切に案内してもらって感謝の極みでした。今度はその学生たちが来日し、大阪大学病院や医学部を見学して、日本文化にも触れあいます。もらった分は無論返すことと、それ以上に楽しんで、また何かを感じるきっかけになるように、こちら側から準備する必要があると感じました。また、コミュニケーションの手段は英語でした。しかし、自分の英語が劣っていて滑らかな意思疎通には限界があると感じました。この 9 日間のプログラムで感じた思いを活かして、次に彼ら彼女らが来る際には、不便を感じずにコミュニケーションできるように努力を尽くしたいと思います。

平成 30 年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 二年

氏名 T.T

1. スケジュール

詳細な活動内容については第 3 項「活動内容」で記述します。

2018 年	8 月 19 日	関西国際空港発、クアラルンプール国際空港着
	8 月 20 日	文化研修 (サンウェイピラミッド、プトラジャヤ)
	8 月 21 日	IMU (International Medical University) 見学、講義受講、文化研修 (クアラルンプール散策)
	8 月 22 日	文化研修 (バトゥ洞窟、ピューター博物館)
	8 月 23 日	Seremban Hospital 見学、Surgical Workshop
	8 月 24 日	メディカルセッション、文化研修 (トレッキング、ペナンの寺見学)
	8 月 25 日	文化研修 (ペナンにて ペナンの丘、寺、海岸散策)
	8 月 26 日	文化研修 (イスラム美術館、イスラム美術ワークショップ)
	8 月 27 日	クアラルンプール国際空港発
	8 月 28 日	関西国際空港着

2. 目的

まず、マレーシアの医学生と交流し、その学習施設や設備、教育方法などについて知り日本のものと比較することで、自らが行っている医学生としての学習方針に改善点を見つけより良いものにしていくことです。次に、マレーシアにおける医療環境、病院設備や医師の労働環境などについて知識を深め、日本の医療と比較してその問題点について考察し、自らが医師になった時に果たすべき責務について、並びに国際医療に貢献できる可能性について考える素養を身につけることです。最後に、マレーシアの文化に触れ、現地の人たちと交流することで、広い視野をもてるよう国際感覚を養うことです。

3. 活動内容

ここでは日程ごとに追っていきます。

8月20日 文化研修

○ サンウェイピラミッド

ショッピングモールの散策を行いました。エジプト色の強いモールで、入り口には巨大なスフィンクスの銅像が2つあり、中の装飾もアラビア風で、日本のものよりも明るく派手な印象を受けました。また、マレーシアでもイオンが一般的になっており、そこにも一部がイオンのコーナーとなっているのが少し驚きでした。全体的にみると、大きさも日本のショッピングモールよりも大分大きかったです。

○ プトラジャヤ

プトラジャヤは、日本における霞が関のような政治の中心都市で、全ての省庁がそこに集まっています。マレーシアには大統領も首相もいますが、大統領は象徴のような存在で実権を握っているのは首相とのことです。首相官邸は日本のものよりも数倍大きく、イスラム色の感じられるものでした。また、隣にあったモスク内部の見学もすることができました。とても大きな建物で、荘厳な雰囲気を感じられました。

8月21日 IMU 見学・文化研修

○ IMU 見学

受け入れ先の大学、International Medical University の見学を行いました。比較的新しい私立の医療系大学で、医学部以外にも歯学部、理学部といった他の学部も併設されています。五年制システムであるため、一年次から医学について本格的に学習していきます。敷地内ではドレスコードが定められており、インターナショナルとあるだけあり、様々な人種の人がありました。見学したのは模型ルーム、図書館で、その他学生と混ざって講義を受講、またカイロプラクティックと東洋医療について簡単なレクチャーを受けました。以下、それぞれについて感想を述べたいと思います。

まずは設備についてです。模型ルームには人体の様々な部位が部分ごとに分けられて置かれてあり、そのそれぞれについて注射や挿管といった医学の実践的な練習をすることができるようになっています。一年次から徐々に使い始めていけるという話を聞き、早いうちから座学と並行してこのような学習もできるのは意欲維持のうえでもいいことであると思いました。図書館は3つの区域に分かれています。まずは声を出してはいけない区域で、ここは勉強や読書のための部屋です。次に人体模型の部屋で、ここには人体の模型がパーツごとに数多く並べられており、本物の人体標本もあるため医学について三次元的に学習することができます。最後に普通の読書スペースで、ここではディスカッションなども行われます。私が一番すごいと思ったのは人体模型の部屋で、ここは学生なら誰でも利用できるとのことで、学習効率を大幅に上げる、とても便利な設備だと思いました。

講義、レクチャーについてです。講義室は阪大の医学科講義棟より少し大きいぐらいですが、ほぼ満席になるほどの学生が出席していました。内容は心筋梗塞に関してで、形式はスライドを用いてそのコピーが生徒に渡され、それに沿って進んでいくという日本の講義とさほど変わらないものでした。内容はとても難しく、ほとんど理解することはできませんでした。カイロプラクティックではその方法、効果について学び、実際に脊椎の動きをお互いに手で感じあうなどしました。東洋医療では中国の医療について学び、実践される様子も見ることができました。どちらも日本ではあまり見かけないものなので新鮮でおもしろかったです。

○クアラルンプール散策

クアラルンプール中心街へ行き、その象徴であるツインタワー付近を散策しました。その付近には洋風な建物が数多く立ち並び、エキゾチックな雰囲気が醸し出ていました。ナショナルパークたる広場も訪れましたが、そこでは八月末の独立記念日にはマレーシア中から人が押し寄せ、お祝いの祭りが催されるそうです。ツインタワーがあるのはKLCC(Kuala Lumpur Convention Center)というショッピングモールのようなところで、そこも高級店が軒並み並ぶ、派手できらびやかな場所でした。そこにあった広場には噴水がありライトアップされていてとても美しく、マレーシア辺縁部とは比べものにならないほど都会な地域でした。

8月22日 文化研修

○バトゥ洞窟

仏教の寺院もあるバトゥ洞窟を訪れました。入り口には高さ十数メートルにも及ぶ黄金の仏像が立っており、そこから階段を約200段ほど上り、そこが洞窟の入り口です。バトゥ洞窟は野生の猿がたくさん生息していることでも有名で、階段の中腹でも数多くの猿を見ることができました。洞窟とはいっても中はとても広く、一つの広場のようになっていました。数体のカラフルな仏像が立ち並び、観光客とみられる人たちも

既に数十人いました。洞窟自体は何百年もかけてできたものだそうですが、中は近年舗装が進み、床はタイルが敷き詰められ、ライトもあちこちで照らされていました。洞窟の中でも猿はいて、直接手渡しで餌をあげることもできます。日本の寺院の厳かな雰囲気とは違い、派手で明るい仏教の在り方を感じることができました。

○ピューター博物館

ピューターとはスズを主な原料とした合金のことであり、マレーシアは世界的なスズの産出地であることから、このピューターと呼ばれる金属を用いて様々な製品が産み出されてきたということで、その歴史を学ぶためこの博物館を訪れました。とても軽くて丈夫であることから、大型製品だけでなく、食器や置物、しおりやチェスの駒などにも使われていました。お土産にピューター製品を買おうとしましたが、少し値段が高いのが残念でした。

8月23日 病院見学

○Seremban Hospital 見学

この Seremban Hospital は IMU の病院で、学校とは少し離れたところにあります。ここでは、病院の全体見学、小児科見学、挿管と採血の実技実習の三つを行いました。以下、それぞれについて述べていきます。

病院見学は、そこの先生と学生たちに案内してもらいました。それぞれの科や外来、病室などを回りました。なかなか歴史のある病院らしく、日本に比べて古さが目立っていました。また、病室はカラフルだったような気がします。宗教色からかはわかりませんが、壁も布団も様々な色が見られました。建物自体が開けていて廊下も外と続いているので、冷房が効いているわけでもなく、どこも暑かったような気がします。

小児科見学は現役の小児科のお医者さんの案内のもと外来や患者さんの病室などを見学しました。こちらは病院の中でも新しいほうの建物らしく、まだ新しい印象を受けました。そのお医者さんはとてもフレンドリーな方で、色々なお話をしてくれました。中でも興味深かったのは、マレーシアの医療事情についてです。マレーシアでは多くの人は公

立病院を利用するのに、財源的にはより多くの割合が私立病院に振り分けられていると聞きました。それ以外にも、その国にはその国なりの色々な問題を抱えているものだと感じました。

実習は挿管、採血の順番で行いました。挿管は先生に教わり、模型のある部屋で、器具の名称と使い方の説明から、実際に気道に管を通すまでを体験しました。実際に人の体でするときはもっと緊迫しているでしょうし、もっと複雑なところを通すということを想像すると、挿管一つをとってもとても難しいことだと思いました。採血は学生に教わりました。手の洗い方から手袋、消毒の順番まで全てが決められていることを初めて知りました。太っているなどで血管が見えにくい場合はより難しいと聞きました。

全体的にみれば、日本と似ているところもあれば全然違うところも多かった印象でした。日本でも病院の細かい設備などについても目を配って注目していきたいと思いました。

○Surgical Workshop

ここでは、外科的縫合のやり方を二種類学びました。この Surgical Workshop というのは、IMU の学生で将来外科を目指している人が集まり、現役の医師のもと実際に外科的治療法の練習をするというもので、これはとても有意義なことだと思いました。本物の手術で用いられる針と糸を使い、鶏肉の皮を縫い合わせるということをしてしましたが、やってみるとなかなか難しく、これを手術室の緊張感の中短時間でこなすのはもっと難しいことだと感じました。私も外科を目指しているので、将来へのモチベーションを高めるうえでもとてもいい経験ができました。

8月24日 メディカルセッション・文化研修

○メディカルセッション

ここではマレーシア側の学生が3つのパートに分かれて日本側は一つずつ回っていき、それぞれで一つのテーマについてマレーシア側の学生が日本側に実技指導を行う、という形をとっていました。3つのパートとは、採血、血圧測定、子宮がん検診です。時間の都合上私が回れたの

は血圧測定と子宮がん検診だけだったので、2つについて感想等述べたいと思います。

血圧測定は機械ではなくポンプを用いて手動で測るものを体験しました。私は早期臨床体験実習の時に一度教わったことがあり、なんとなくですが覚えていました。IMUの学生は全員一年次でこの使い方を学習するらしく、英語ですべて教えてもらい、すごいと思いました。マレーシアにはまだまだ田舎な地域もあり、医療施設の整っていないところだと医療器具を持参して診療にあたるらしく、その際には機械よりも手動のほうが持ち運びに便利なため、手動でやる方法も覚えていないといけなという事情があると聞きました。説明の後実際にお互いを測りあい、血圧測定の方法を学ぶことができました。

子宮がん検診では、女性の膣の模型があり、実際に用いる器具で練習をすることができました。子宮がんは女性で乳がんの次に多いがんで、乳がんより分かりにくいので、検診による早期発見が非常に大切となっています。その方法ですが、数年前に新たな方法が確立されたらしく、プラスチックの器具で開口部を広げ、ブラシで子宮内に触れるといったものです。女性が不快感、時には痛みを感じることもあるので、検診前の十分な説明、また施術の手早さがいかに大切かについても教わりました。

全体としてですが、マレーシアでは術前の説明、承諾の確認についてとても徹底されていると感じました。理由はマレーシアの多文化社会が主だと思います。様々な宗教・民族が混在する地域では、各個人の信条などによって受けられる施術が変わってきます。術前にこれから行う施術を具体的に説明し、そこに伴う危険などについて患者と意見を交わしながら最終的に同意を得てから施術を始める、というのが特に重要となっているということを知ることができました。

○トレッキング

マレーシアの森の中でのトレッキングということで、暑さもさることながら、蚊など虫の多さがとても大変でした。蟻にしても日本の数倍もあるようなのが地面をたくさん這っているのにはマレーシア側の学生も怖がっていました。植物も日本のものとは違い、葉も大きく幹もとても

長いような樹が生えており、熱帯の植生を肌で感じることができました。

○ペナンの寺見学

日が暮れてから訪れたこの寺は、砂浜のすぐ近くにあり、仏教寺院というよりは観光スポットとして役割を果たしている感じでした。たくさんの観光客がいましたが、あちこちがライトアップされ、幻想的な雰囲気が出てとてもきれいでした。そのライトアップが設置されたのも一年前ぐらいのことらしく、近代的な寺という印象を受けました。

8月25日 文化研修

○ペナンの丘

ケーブル線を使って山の斜面を登っていき、その中腹にあるこのペナンの丘は、とても眺めがよく、ペナン中を見渡すことができます。訪れた日はとても天気が良く、気持ちの良い陽気でした。周りにある植物も日本のそれとはまるで違い、見たこともないような花や葉の形を観察することができました。

○ペナンの寺、海岸

今回訪れた寺はバトゥ洞窟のものとは違い、中華系の影響を感じさせる寺でした。赤や黄などの装飾が多く、中には数多くの仏像が立ち並んでいました。漢字で書かれた書物や壁紙、銅像などもありましたが、やはり日本とは違う雰囲気を漂わせていました。その後向かった海岸は、海上に建てられた家や店が並ぶ地域で、ローカルな生活を間近に見ることができました。その一番海よりの部分は開けていて、ペナンから他の島々を一望することができました。

8月26日 文化研修

○イスラム美術館

マレーシアで多数を占めているイスラム教の歴史を知るため、この美術館を訪れました。建物全体がモスクのようなドーム型の構造をしており、中には数多くの模型や絵が展示されていました。マレーシア側の学

生が展示物について解説して回る、という形をとっていました。サウジアラビアにあるイスラム教の聖地の模型では、イスラム教信者は一生に一度はそこを訪れなければならない、常に大勢の人がそこに押し寄せるため、高齢になって訪れる人は、そこに着く途中やそこで巡礼している最中に大勢が亡くなるという話を聞き、とても衝撃でした。日本ではあまり馴染みのないイスラム教の文化・歴史に触れることができました。

○イスラム美術ワークショップ

マレーシア現地特有の文化である染色の方法を学び、それを実践しました。布に染料を筆で塗って模様を描く方法で、Tシャツを作ることができます。一時間程度で完成し、すぐに乾くので持ち帰ることができました。また、そこでマレーシアのミルクティーを作る方法も体験することができました。

4. 成果

ここでは医学研修と文化研修に分けて述べていきます。

医学研修

医学生として参加した今回のマレーシアでの研修は、とにかく初めて知ることばかりでした。向こうの大学は五年制であるため、日本よりも進度は速く、ほとんどが私たちと同じ二年生ではありましたが日本でいう三年生四年生ほどの知識を皆が持っているのではないかと思うほど、彼らに教えられることばかりでした。そこで、第一に強く思ったのは、自主的に学ぶ姿勢の大切さです。彼らは日本の医学生よりもずっと自分から何かを学ぼうとし、そしてそれができる環境も十分に提供されていたように感じました。日本も学ぶ環境は十分整っているので私たち学生ができることももっとあるのではないかと思いました。これからの学習意欲を上げられたことが、一番の成果だったと思います。

次に、マレーシアと日本の医療環境について比較考察することができました。多文化社会であるマレーシアの病院はそれに適応する形で様々な工夫が散りばめられています。日本でも今後ますます国際化が進み外

国人滞在者の数も増加することが見込まれているので、その対応として病院設備の改善も必要になるのではないかと思います。また、私立大学であるからか、日本とは違い医学部としての研究色は薄かったように感じましたが、その代わり臨床的な実習の場が低学年の内からたくさん用意されているのがわかりました。これは日本でも臨床の道を志す学生にはオプション的な形でも機会があればいいと思いました。日本にいながらでは気づけない日本医療の良し悪しについて考えることができたのも、今回の大きな成果の一つだと思いました。

最後に、マレーシアの学生の英語力です。英語を母語としない人でも医学用語を英語で勉強しており、会話には全く不自由しないほど英語の能力が高い人ばかりでした。将来はマレーシア国外で働くことを考えている人も少なくなく、日本との違いを大きく感じさせられる一面でした。世界共通語としての英語を使えるということは、後には海外での学習の機会にも役立ち、それだけ自分の医学的能力の成長にも役立てられるということです。医者になっても英語は必須なので、これからも英語学習は続けていこうと思いました。それでも今回の研修で英語漬けの日々を送れたことで向こうの学生とコミュニケーションを図ることができたので、それも一つの成果であったと思います。

これら3つ以外にも様々なことを見学し、学ぶことのできた、実り多い九日間になったと思います。

文化研修

マレーシアは、マレー系、中華系、イスラム系を主とした多文化社会です。そのそれぞれについて独自の色を出した建造物などが郊外だけでなく都市中心部でも見られました。その特徴ある建物や施設をたくさん訪れることで、マレーシアの雰囲気を感じることができたのが第一の成果であると思います。また食べ物についても日本では珍しいフルーツや食事様式を体験することができました。観光客としては訪れにくい現地の人であふれる出店を楽しむことができたのも、マレーシアの学生がいたからこそであり、地元のローカルな雰囲気を体感できてよかったです。街並みも環境も違う中、マレーシア現地の生活を存分に感じ取れたと思います。

中でも最大の成果はマレーシアの学生たちと友達になることができたことです。英語が一般的なマレーシアの学生たちに対して最初は言葉の壁を感じることもございましたが、次第に打ち解けるにつれ彼らと色々なことについて話すことができ、お互いよく知り合うことができました。インドやシンガポール、香港とマレーシア以外から来た生徒ともたくさん話すことができ、様々な文化について教えてもらうことで自分の視野も少しは広がったかなと思います。同じ医学を志す者として、これからも協力し合える友達をつくることができたことが、今回の滞在で一番良かった点だと感じました。

5. 抱負

今回の研修で、阪大の教務の方々並びに先生方、マレーシアの先生方にも大変お世話になりました。また、マレーシアの学生たちは私たちの受け入れのために前々から準備を重ね、九日間私たちにつきっきりでサポートにあたってくれました。まずは今回私たちに協力して下さった方々に感謝したいと思います。そして、来年の一月から私たちが受け入れる際には徹底して臨み、彼らの日本滞在をより良いものにできるよう全力を尽くしたいと思います。その際には再び阪大の先生方にもご協力頂くとしますので、よろしくお願いいたします。

九日間という短い期間ではありましたが、貴重な体験を数多く経験することができました。これからも日本で勉学に励み、この研修を生かして将来は世界で活躍できる医者になれるよう、努力していきたいと思っています。ありがとうございました。